主格名詞を同格的に重ぬる時にナガラニテナルガ等の意に通ひて一種の接辭の如くなる。

長一丈許なる木の周一尺許なるが立てり

爲朝は六尺ばかりなる男の目かどふたつ切れたるが云々(保元)

いとむげにちごならぬ齡の(ニテ、ナガラ)まだはかぐ〳〵しう人のおもむけをも知り給はず(若紫)

大臣の後にて出立もすべかりける人の(ナルガ)世の癖ものにてまじらひもせず近衞の中將をすてゝ(若紫)

此の如き主格一轉して

うつせみの世の人事の繁ければ忘れぬものゝかれぬべらなり(古)

たのまぬものゝこひつゝぞふる

とはものゝお前ではなし

などゝなればものゝは副詞を作る接尾語とも言はる。親と同じ心といふを「親の同じ心」ともいふも領格にはあらで親のといふ主格の下にある(思ふ)などを略せる語法なるべし。

二五の十

金が一匁五圓の作代が一圓、合せて六圓

「二四が八」といふ時は二四が主格なれど、二五のは難物なり。二五の相乘は十なり」といふ如き文の約にや。又「二五より起る十」といふ如き意味にて尙領格なるにや。又は原因と結果とをのにて單に接續せるのみの一種の言方にや。前三例ののを總べてニテに代ふるに意義の通ずるを見れば、同主格の變にや。副詞をのにて接續する「ドドンのドン」「エンヤラヤのエンヤラヤ」「サのサ」の類にや。研究を要す。縱一寸の横八分の箱」といふを一寸にといひても固より聞ゆれど、語は異なり。七つに八つの十五です」の類他に多し。

方言にては主格ののもなとなりて、がと同じ用をなす。品(ヒシ)なわるい」論ない」詮ないなど

(6) **處置格の一種**　撥音の名詞に附きたるをののと變じたるは鎌倉の末よりありて、謠曲などにも多し。

鳳輦のさしよせ　先陣の仕うまつる　院宣のたまはる

三十餘年の經て(以上保暦間記)

然るに後には撥音の下ならぬにも用うることあり。

二人の者大納言の左右の耳に口をあてゝいか樣にも御聲の出すべく候とさゝやきて引き立て奉れば(平家)

口上の(な)以って　御免な蒙り　槍の合す

十訓抄に「これも心のすべきによりてなりとあるは主格にやあらむ、疑はし。飯の食へる工夫」などは可能動詞に對する主格にて異なり。思ひ誤るべからず。又三河物語に「後之世に御普代の御主樣之しらせん爲に」などあるはにの處なり。全くの訛語なるべきか。「彼等ヲ一番之ヤメサスル事モ」などともあり。「例の如く遊ぶ」又は「例のあそびす」を「例のあそぶ」といふもあり。初に體言に言ひ續くべくのといひたるが中途にて用言に代へたる樣の事もあるべし。萬葉九に「問はまくの欲しき吾妹が家乃不知(シラナク)」とある樣なるは知らなくといふ體言に續ける領格にして、又「世を捨てし身の訪ふ人も無ければ」などいふは「ソレヲ訪フ人モナケレバ」といふ全體の主格なり。此の如き種々の用例あるを類推して、さて氣取りたる積にて「口上な以って」などはいふにもあるべし。

三　つ　(古語)二名詞を接續するはのに同じく領格の如くなれど、其の用法に略定れる慣例ありて、熟語名詞を作る者の如し。

國つ社　晝つ方　野つ鳥　上つ人　邊つ浪

前つ君　遠つ淡海　上つ毛　下つ總

四　に　粘着の義あり名詞を用言に接續す。

(1) **副格**

鄕里に歸る　海に臨む　道に聽く　山に近し　松風を琴に聞く

商人に仕立つ　主義に死す　學問に誤らる　人に勝る　足にはく

音に聞く　見るにさやけし　起くるに早し　こと更心驚かれぬるに

侍り(撰集抄)　月に樂む　助くるに能はず

(2) **並立格**　副格の轉にて、物を次第に數へ添ふるに用う。

春に夏に秋に冬を四季といふ

(3) **副詞を成す**　名詞、形容詞の語根、用言の第二、第三、第四變化に添へるなどの種類あり。

時に　朝に出づ　明に　靜に　詳に　降りにふる

懲りにこる　思ふに　顧みるに

止むべき物とはなしにはかなくも散る花ごとにたぐふ心か(古)

逢ふまでの形見も今は何せんに見ても心のなぐさまなくに(古)

(4) **前提法**　用言の第四變化に附きて法に準ず。順逆平の三種あり。口語には

のにといふ。その形式は名詞に附きたる態なり。

日照るに雨ふるに眼大なるに視力よわし

忠告せしに聴かず　我も行かむに君も行き給へ

上野に物せしに花は滿開なりき

五　を　強辭にて處置する名詞を抑ふ。

(1) **處置格**

水を呑む　書を讀む　字を書く　犬を打つ

(2) **副格**

境を出づ　家を繞れる竹　役所を退く

(3) **前提法**　に準ずるは前のにと同じく下略含畜の法にて後の感嘆なると

似たれど、今は區別を立つ。用言の第四變化に添ふなり。但ものをはなほ此の類なり。

雨ふるを傘なしに出づ　價高きを質も好からず

君は知りたらむをなど來ざる

そは一度は習ひしものを今は忘れたり

我も行かむを君も行き給へ

六　て(口語)　**にて**の約なるが、ては動詞にのみ添ふ者にて、此の上にはアリヨリ於キ等の動詞を含みたる者なれば、にてはテニヲハとは稱すべからざれども、其職掌より言へば文語のにと全く同じきも多ければ、此にて說くこととゝせり。

(1)　主格を說明する**同格名詞**を指定す。(下の動詞形容詞に對しては副格)

これは筆である(御座ル、オマス)　あれは人でない

之を文語に反せば「筆ニアリテアル」「人ニアリテナイ」となる。其のアリテアルといふ處は一種の重語なれど、語源を忘れては文語のニと同じ樣に用うるなり。さて之を體言形容詞に附けて

それは本當でございます　夜は靜である

無事で居ります　御立派で入らっしゃる

など言ふ時は名詞に準じて體言を指定せるものながら、副格名詞とも同格とも言

ふべからざれば、前章に之をナ活形容詞の第二變化連用法と說きたり。されば副詞となりてアルを修飾する者と見るなり。又

信玄は兵法家で政治家(だ(ロ))である(イ)

(イ)の時は兵法家デを政治家デに並ぶ副格と見れど、(ロ)の時はナ活の中止の如くそれを助動詞ダの中止と見ざるべからず。是名目論の上より已むを得ざるなり。

(2) **場所**を表す

英國で學問した(イ)　海岸で遊ぶ(ロ)

此等は文語はニとも言ふべく、其の方よりすれば副格名詞なれど、ニテといふ時は動詞を含みて副詞小句と言はざるべからず。その時はデは接尾語又は後置詞などいふ名目に變るなれど、通俗にはテニヲハといひて英國デ海岸デを副詞といひても可なり。『文語で言ふ』などのデも一種の場所なり。

(3) **所由**を表す

手で打つ　火で燒く

汽車で行く　船で歸る

此等は文語ニヨリテシテヲモテなどの場合なるより言へば副詞を作る者なれど、羅甸の器格とか古語の車カラなどいふ例に充つれば副格とも言ひつべきなり。

役目で働く　一個人で考へる

などは副詞を成せる者と定めて可なり。

(4) **原由(因爲)**を表す

風で倒れた　病氣で休んだ。それで落第した

風デ病氣デは實は副詞なり。ソレデは接續詞と成れり。此のデ動詞形容詞などの連體法の名詞と見るべきもの又は同樣の句などにつきて準前提法的に副詞(句・小句)を成す。

あれは汚いので困る

雨が晴れたで出かけよう

君はよく勉强するんで愈進歩するよ

(5) **副詞に**添ひて意義を加ふ

皆で騷ぐ　唯ではやらぬ

今では大臣だが鄕里では昔の樣に思って居る　今日でも好い

私でも好いか

されど

茶でも飲んで話でも聞かう(イ)

雨でもふり相だ(ロ)

などはナドと同様の職掌にて接尾語と言はざるべからず。而して(イ)は處置格にて(ロ)は主格なり。デモ先生などいふ時は接頭語なり。

(6) **獨立して接續詞となる**

お前はちとなまけるで段々退歩する

案内がありました。で参らうと思ひます

是は上の語に附くべきが離れて獨立したる者とも見らるれど、なほソレデの略とも思ひ紛ふべからず。

する方穏當ならむデハデモ亦然り。

注意 「無クテ」「ナイデ」などを比較するに、デ共に用言に附きて其の連用中止法を成すが如きより雨辭の區別を曖昧に必得べからず。テは飽くまで動詞に附く者、デは必體言に添ひて之を指定し或は副詞を造る者なりと知るべし。又「書カンデ」「カヽイデ」「噛ンデ」のデのテニヲハなると文語「書カデ」「カマデ」のデの助動詞なる

(7) **名詞を動詞に化す。**

母はまだ存命で居ます

私が或る家に書生で居た時

あの人は少尉で行って中尉で歸った

此等の語氣は明に動詞を含みて「存命シテ」「書生トナッテ」「少尉トシテ」等と解せざるべからず。さてそれより副詞的に動詞に係るなり。

七 へ 方の義動作の行はるゝ方角を示して副格をなす。

東へ向ふ 西洋へ行く

へは本來名詞なりしが接尾語に轉じ更にテニヲハとなり、口語にては方角の外に地位目的をも大らかに表すことなど總べて第四章の格の段に説けるが如し。

八 こと 名詞を抑ふ

(1) **一致する所ある名詞を抑へて副格とす、**

之を大化の改新と言ふ　木あるを貴しとす

君子を愚人と思ふ　花を雪と見る

雷を車の聲と聞く　金を米と換ふ

人とある者は恩を知らざるべからず

追々春となる　蛤雀と化す

此等すべてニと言ひ換ふることを得。トイフをニイフにしては如何しけれど「馬を鹿にいふ」西洋にては女にかしづく事を善き事にいふ」など通せざるにあらず。されど「君に仕ふ」「人に遣る」「犬馬に劣る」「狼にかまる」等のニはトと言ふべからず。一致化成の場合にニトは相通ひても、ニは單に目的として表す意重く狀態的に軟に、トは動作的に硬し。

(2) **與同對比**の意にて副格又は並立格

人と樂む　君と親し　汝と遊ばむ

敵と戰ふ　油は水と合はず　時と推し移る

才と學とあり　兄と弟は一人づゝなり

口語に比較の意にも用うることあるは此等の轉なり。

私は君とは弱い　油は水と輕い

(3) 體言と見なすべき者に附きて**副詞を成す**。

生きとし生く　讀みとよむ

ありとあるもの　から〳〵と笑ふ

いづれをかゑるしと思はん三輪の山見えと見ゆるは杉にざりける(拾)

我が來つる方も知られずくらぶ山木々の木の葉の散りとまがふに(古)

つれもなき人をやねたく白露のおくとは歎きぬとはゑのばむ(古)

カラ〳〵などの聲貌語につくは略しても用うるはイフの目的名詞にトを抜くと同じ樣なるべし。

日月は流るゝ水と早し　會する者十人となし

さ夜中と夜はふけぬらし　ゑばしと留む

など副格名詞の下に語を略せるとも言はるれど、副詞と見ても可なり。名詞形容詞副詞をトを挿みて疊むも此の類なり。

よしともよし

うづまさは神とも神と聞え來る常世の神を討ちきたますも(紀)

世の中はいさともいさや風の音は秋に秋そふ心ちこそすれ(後)

(4) (口語)動詞形容詞の第四變化に附きて**準順態前提法**をなす。

本をよむと頭痛がする

こんな日に出ると日射病になる

此はバよりは獨立詞なり。

(5) **獨立詞に變ず**

「とかく」「と見る」「とは云へ」「と(さうするとノ上略)など副詞接續詞などに轉ず。

「といふ」の下略のトはなほ上の語に附けるテニヲハなり。

口語、接續詞の「ソレトモ」などの「ト」の意義を考へ見よ。

九 より・から

發點を表し比較・所由・依托にも轉ず。

(1) **副格**

天より落つ　　鄉里より來る

氷は水より輕し　　生絲は繭より取る　　人より勝る

馬より通ふ　　人より呼ばる

牛後たらむより雞口たらむ

短きより高きに上る　　あへて口より外に出さず(宇拾)

よりは古くよともゆりともゆともいへり。其の比較物を表すは前項との(2)に似て、

漢文にて與字のとにもよりにも當るに類せり。所由・出自を表すはニに近し。

わがせこをあが松原欲見渡せばあま少女ども玉藻刈る見ゆ(萬)

かしこきや御言かぶふり明日由利やかえがいむたねをいむなしにして(萬)

石見なる高角山の木の間從も吾がふる袖を妹見けむかも(萬)

水底の月の上より漕ぐ舟の棹に障るは桂なるべし(土佐)

白川といふ處に住み侍りけるに前より大貳藤原輿範朝臣のまかり渡りたる

序に(後)

御形より始めて飽かぬことなく見ゆる人の御有樣おぼえなり(竹河)

いわけなくより宮の內より生ひ出でゝ身を心にも任せず(梅が枝)

天の戸をおしあけ方の雲間より神代の月の影ぞ殘れる(新古)

(2) 動詞形容詞助動詞の第四變化に添ひて**原由副詞**を造る。口語のカラ是なる由前に格の段に言へり。

彼は貪るより却って損を招く

氣前が好いから人に愛される

(3) **副格より副詞に轉ず**

君の考は頭から間違って居る

彼の人は我から損を取る

我は中心より彼に敬服す

此等は「頭カラシテ」とやうに下に動詞ありて副詞小句を成すを畧せるなるべし。ヨリ・カラの下體言につゞく者は特に此の動詞を入れて見ざるべからず。

東京より(シテ)西の方は平野なり

來月より(シテ)後は誓って勉強すべし

此より(見テ)彼方は隣郡なり

「花より外に訪ふ人もなし」などは「花ヨリ」より「外ニ」といふ形容詞に續ける者の副詞となれるにて「花の外に」といふ時は「花ノ」といふ領格より「外」といふ體言に續けるなり。「枕より又知る人もなき戀を涙せきあへずもらしつるかな」(古)の「枕ヨリ」は「枕ヨリ外ニ」の意に解すべし。

私の友人はあなた(より外に)無い

彼奴は風からして好かぬ　東京から見ると大坂は物が安い

此等は副詞小句をなすなり。

甲は乙よりも大家なり(スグレタル人ナリ)

我は君より二歳の兄なり(長ジタリ)

かゝる場合に副格名詞より名詞にかゝる様に見ゆるより「ナリ」にかゝる副詞かとも思はるれど、尚名詞の性質職掌は變らぬ様なり。さて是は副詞の指定助動詞にかゝる者あるが如く、副格名詞よりナリにかゝれると見てあるべし。

(4) **副詞にも添ふ**

最初より
兼ねてより　我は從へり　元より然り

東京に來てより十年をすぎたり

(5) (口語) **逆態前提法に準ずべき者**

御逢なされてからたわいあるまい(忠臣藏)

此等はタトテタ所ガの義なり

十 まで　着點を表す

(1) **副格**

我は一度北京まで行けり

今年の冬は寒暖計零下五度まで達せり

(2) **副詞にも添ふ**其の他體言に準ずる者に添ひて副詞をなすもあり。

今まで知らず　　遅くまで遊ぶ
さまで苦しからず　何時までかくてあらむぞ
言ふまでもなし　聞くまでのことなし
飽くまで爭ふ　死ぬるまで學ばむ
夜朋くるまで路に迷ふ
萬葉集に「歸り來までに拾遺集に「散る花は道絶えぬまで埋まなん別るゝ人も立ちやとまると」など終止法に附けるは變例なり。

(3) 到着より一轉して程度を表し、併加又は單一にも轉ず。是には名詞なるも副詞なるもあり。

物や思ふと人の問ふまで色に出でにけり
冬ごもり思ひかけぬを木の間より花と見るまで雪ぞふりける(古)
悴まで御世話に相成　家寶まで賣
風まで吹く　鳥にまで劣る
御見舞まで如此に候　御禮の印まで差上候
我は君の反省を促すまでなり
出來ぬ時はそれまでなり
彼は蔭に廻ってまで惡口をいふ
此の殿(義孝)は御形の有りがたく末の世もさるべき人や出でおはしまし難かるらんとまでこそ見給へりしか(大鏡)
新聞賣とまで零落せり

此の終の二例のトマデのトより上は副詞と見てあるべし。

以上九辭は名詞(體言)に附く者なり

第二　動詞(形容詞助動詞の動詞に準ずる者)に附く者

十一　ば　順說的接續の用をなす。(根本ハなるべし)

(1) 第一變化第五變化に附きて順態前提法をなす

花咲かば告げむ　風吹かねば花かすむ
品も好ければ價も安し　止せってへば止さんか
「虎穴に入らずんば虎子を得ず」「戀しくば尋ね來よ」などクシク活の類なるは第一變化なければ、その第二變化の下に動詞を畧せるなり。又連用的平接、及逆說のことも法の章に言へり。

(2)（口語）ならたらの外は第一變化に附かず。

どうしたらば好いか　天氣ならば行かう

「打たば打て」「行かば行け」とやうに文語その儘を用うる地方もあれど一般にあらず。ナラバタラバもバを略すること多し。（ナラタラの確說に用ゐらるゝ事は前にいへり）

(3)（口語）**ければ**　打消のヌに附く。

行かんければならぬ　せんけりゃならん

是はク話の第五變化の語尾ケレを吸收せる者にて、ケレドモの例と同じけれども、好ましき語法にあらず。而してンの下にのみ附く所注意すべし。之をナケレバの變と考ふる人あれど、ナイを用うる地方の語にあらざると、シンケレバと言はざる等とより見れば、非なり。東北の一部及出雲邊の人の東京語を擬して往々

雨が降るければ　さうだければ

など確定前提法の意に言ふは一種の類推聯想より起れるなるべけれど、早く注意して改め貰ひたきなり。

十二　ど・ども　逆說的接續

(1)　第五變化に　附いて確定或は不定の逆態前提法をなす。其のモは一種の咏嘆辭なり。

色は匂へど散りぬるを

位高けれども驕らず

(2)（口語）**けれども**（けれど）　第三變化に附く。文語(1)に同じ。ケドモ・ケンドなどと訛る。ク活の語尾を吸收せるなり。

十三　と・ども　假定逆說的接續

(1)　第三變化に　附いて前提法をなす。クシク活には其の第二變化の下に動詞を略して附く。「知らずともよし」など之に準ず。助動詞ムラムケムの類に附かず。上一段活には古くルを略しても言へり。

夜泣すとたゞもり立てよ

繪に書くと筆も及ばじ少女子が花の姿を誰に見せまし（堀川後百首）

ひとり寢と茭（コモ）朽ちめやも綾蓆緒になるまでに君をし待たむ（萬）

愛敬無くと言葉しなめきなどいへば（枕）

嵐のみ吹くめる宿の花薄穗に出でたりとかひや無からむ（蜻蛉日記）

萬代に見とも飽かめや(萬)

(2) (口語)想像に附く。(文語と同じくも用うれど)

死なうと搆はぬ　悪からうとやる

どんな事があらうとも變らぬ

「無論好イトモ」「サウデストモ」などのトモは文語「メデタシトモメデタシ」などいふトモの下略にて「七」の(3)に屬す。

十四　て　一の動作より他の動作に移るを表す。(此の辭ちと完了ツの變化の如くなれど、今の職掌關係を表すに止るよりテニヲハとす。)

(1) **第二變化に**　附きて連用(中止、副詞)或は前提法とす。ナリタリに添ふ。

教へて導く　天高くて氣清し

知りて行はず　身にいたづきの入るも知らずて

(2) **連濁**　ガバマ行四段活及ナ行變格につきてはデと濁る。

注意　口語「知ランデ」「教へナイデ」「知ライデ」のデは此の連濁にあらず。又文語「知ラデ」等のデは打消助動詞ズテの合なり。

十五　つゝ　重複、繼續、兼他の意にて第二變化に附く。形容詞及相以外の助動詞には添はず。完了ツの重用なり。

歩みつゝ語る　酒をくみつゝ暮うちける人(古)

筑紫に侍りける時に罷り通ひつゝ(今昔)

墓に行きて物いひつゝぞ歸りける(今昔)

さるべき日ばかり詣でつゝ見れば程なくそとばも苔むし(徒)

音羽山音に聞きつゝ逢坂の關のこなたに年をふるかな(古)

知りつゝ行はず

かくナガラに通ふ者あるより、ツゝを接尾語にするか、ナガラをテニハに移すか、兩者を同類にしたき樣にもあれど、此は更にテに近き所を取りてテニハに入れたり。ナガラには兼他の義あれど重複繼續の義は遙に薄く、ツゝは動詞の進行繼續態を作るなど文法上ナガラよりは關係的なり。

十六　し　(口語)　終止形に附きて中止法をなす。

學問もあるし才氣もある

色も白いし形も好いし申分はない

これは動詞爲(シ)の轉にもあるべきか。(第三種)のシとは別物なり。

此の外に動詞所属なるヲニモガあれど、轉用なれば、各本來のに分ちて說けり。

第三　諸詞に附く者

此に諸詞に附くといふは其の所属を擇ばざる謂なり。其の名詞に附く者も格に關せず、動詞に附く者も法を表さず、爾餘の詞に附く者も皆テニヲハ自身の意義を添加するなり。此の種を又二に別つ時は、

(い)感嘆に基づく者

十七　ば　取り立て、區別し、感歎す。

(1)　名詞に附きて**主格處置格**をなす。(自餘の格にも添ふ)

春は來ぬ　　われ酒は飲まず

日本は神國なり　　花は美し

古文には**副格**なるもあり。

人の心こそうたてあるものはあれ(葵)

蠅こそ憎き物の中に入れつべく愛ぎやうなき物はあれ(枕)

殿守づかさこそなほをかしき者はあれ(枕)

何事も衰へ行けど此の道こそ世の末に變らぬ者はあれ(新古)

東海道は尾張の國熱田に一泊し」伊賀の國は上野に於いて仇を討ち取りなどいふ時のハはノを提示したる者にて領格なりとも言はれげに見ゆれど、尚主格にして下に語を略せる者の如し。

「東海道は尾張の國熱田(の東海道)に一泊し

「伊賀の國(詳しくいへば伊賀の國)は上野(の伊賀)に

我は(讀本は一の卷(の讀本なる)を讀む

貴殿は東京に住み給ふとや、(その)東京は何處(の東京)に住み給ふぞ

(2)　動詞形容詞の連用法、副詞、接續詞等に附く

はさまれて足はうづきの時鳥鳴きはをれどもとふ人もなし(著聞集)

行きはやられず　　見ずはあらず

悲しくは思へど今はあきらめたればやがては落ち居る時あるべし

斷じて行はむか但は見合せむか又は再考せんか

さてはあまりに未練なり

願ハクハ恐ラクハ等のハをバと濁るは前提のバと混じて非なり。されど一種の音便ならば其の地方の方言として見るべし。處置格のハをも濁りて「酒ば飲むなど言

ふ地方もあるなり。イツソの意味に用うる「同ジクハ」は濁らざるなり。「もし誤る時んば」などいふは「ナクンバ」「ズンバアラズ」などの同例にて「イッバ」は「イフハ」の音便なるべし。「今日は」をコンニッタといふは「出來」をシュッタイといふに似たり。又形容詞の副詞法にバをそへて前提法とする時、之を濁らずしてハといふ事あるは、テハの義にて誤にはあらざるべし。此の如く考へもて行くに、ハバ同源かとも思ひなるなり。

來は來たが話相手のない徐福
讀みはよめども意通せず

此等はクルコトヨムコトにて名詞ならんか。然らば主格なり。ばたクルニハヨムニハと同じくて副詞ならむか。兩説遽に定めがたし。

(3) 名詞及準體言に附きて**文を結ぶ**。ヨに通ふ。

吾が妻はや(紀)　いかさはせんは(伊勢物語)

さて其の文は皆見てしはと宣へば(枕)

すは「奴めを手延にしてたばかられぬる」は(平語)

これ見よ「誠におはしましたる」はといへば(宇拾)

「君が住む宿の楫を行く〳〵と隱るゝまでにかへり見し」はや(拾)

さはいへどすぐさざりけるは(紅葉賀)

此のハ蓋ハの第一義なるべし。今言にワと轉呼し音便にはワィと延ぶ。而して終止の語にも添ふ。

まあ好いわ　知らんわい　止しませうわい

十八 も　婉曲に感嘆し、重複を表し逆説の接辭になる。

(1) **名詞に附いて主格處置格をなす**。(他の格にも添ふ)

年も暮れぬ　煙草も吸はず茶ものまず

茶も酒も嗜好品なり　何も無し

これは金も純金なり　誰も知れり

疑詞につく時は無論一切の義をなす。

(2) **動詞形容詞の連用法及副詞接續詞**に附く。

思ひも寄らず　いひも兼ぬ　聞いても下され

辛くも老いたり　覺束なくも呼ぶ小鳥

さても今宵は明月なり　智にして而も仁なり

(3) 動詞形容詞の第四變化形容詞の第二變化に附きて**逆態前提法**をなす。

矢は當らざりしも痛手はおひぬ(平治)
人はいみじくたけくも力及ばぬことなりけり(愚管抄)
渠鳥ならずも羅に入りぬ獸ならずも狩場にあり(八犬傳)

(1) **終止せる語に附く。**感嘆なり。

鶯鳴くも　綱手かなしも　かねて著しも

十九　ぞ

指し抑ふ。「其」の濁れるなるべし。

(1) 名詞に附きて主處格をなす。(他の格にも添ふ)

花ぞ咲く　物ぞ思ふ　風ぞ强き
疾くするぞ善き　膽太きぞ男はあらまほしき
誰ぞある　何ぞ見出でよ

疑詞に附けるはカと近し。されど疑問の意あるにはあらず。

(2) 動詞形容詞の連用法、前提法、及副詞接續詞に附く。

思ひぞ歎く　來ればぞ歸る　よくぞ來し
又ぞ行かむ　さればぞ人も懷くめる
何すれ(ば)そ斷行せざる

(3) 動詞形容詞の第四變化及名詞に附きて文を結ぶ。

風はよきぞ　此は彼が書きたるぞ。
彼は誰ぞ

(1)(2)は語を起す者にて係といひ之を結ぶには下第四變化を用う。此の(3)は係にあらず語を抑へ止むるにて、實は體言として受くるなり。此のぞの上にナルを略せりと見る說もあれど、ナリの代にゾと抑へたりと見る方然るべきか。

な來そ　な忘れそ

など禁止なるには第二變化に添ふ(カサ變格は第一變化に)

人を食ふ人種もありとぞ

などは下に動詞を省けるにて係のなり。

(4) **ぜ**(口語)　ぞの轉にて少し和げたるなり。ゾと同じく文を抑ふるに用ふ。但「何ぞないか」「誰ぞ居ないか」などの場合には用ゐず。

雨が降るぜ　早く起きようぜ　面白いぜ
それは棄てるんだぜ

二十　し

ゾより少し輕く、取り立つる意あり。文を結ぶことなく下語の法を

變せず。用法ゾの(1)(2)に同じ。

君し思はざ我もたのまん
宮も藁屋もはてしなければ

えにしあれば岩にも松は生ひにけり戀をし戀ひばあはざらめやは(古)

人來〳〵と厭ひしもをる(古)　何しかもそこばく戀ふる
生きとし生けるもの　何しに急ぎ越えけむ(爲ト云フ説モアリ)
何時しか年も過ぎぬ　今し代は盛なり
うゑし植ゑば秋なき時や咲かざらん花こそ散らめ根さへ枯れめや(業平)
太政大臣禪師の理の如く勸め行はしめ教へ導き給ふに依りてしかく奇しく
尊き驗は顯れ給へり(宣命)

二十一　なん(なも)

ゾに似て稍婉曲に咏嘆の意あり。文の結となることな
く、係なるを結ぶには第四變化を用う。用法ゾの(1)(2)に同じ。ナモは古し。共に散文に
多く、歌には少し。

月をなん見る　漕ぎになんこぐ
しかなん思ふ　さればなん我もいひたる

思はん友と對ひ居たらんなんうれしかるべき
身まかりてなん誠の名は定るなる
云々と云ふ言に在るらしとなるもおもほす……此の尊くうれしきことを朕
獨のみや喜ばむと念してなも太政大臣朕が大師に法王の位授けまつらく(宣)
ナンは文を結ぶことゾの如くならず。
一言かくなん(申ス)
昔の男は髮を結ひけりとなん(イフ)
中將召しつればなん(ワレ參リツル)

二十二　こそ

強く指して取り立つ。

(1) 名詞につきて主格處置格をなす。又副格にも添ふ。
(2) 動詞形容詞の連用法前提法及副詞接續詞に附く。此等のコソの係を結ぶは
第五變化にてす。(結ばざるもあり)
常盤なる松こそ立てれ
云々の裝したるこそ重盛よ
人こそ見えね(ド)秋は來にけり

古は皆かくこそありければ人の心もすなほにこそありけれ

更にこそ信せられね(大鏡)

櫻花さきこそ匂へ

君を思へばこそ忠告もすれ(ド思ハズバセジ)

明日までも延べばこそ吉野法師も奈良大衆も入るべけれ(保元)

鏡なす我が思ふ妻ありと言はばこそ家にも行かめ國をもしぬばめ(允恭紀)

此の山のつきばのみこそ此の川の絶えばのみこそ百磯城の大宮所やむ時あらめ(萬)

此の終の二例の如き順假提法の下に語を略しては、反語に用うるなり。

國の上など思はばこそ(殊勝ニモアレ)彼は自己の利より外に知らず

君が代を何にたとへんと思へども果なきものはあらばこそ(譬フベキ方モ)あらめ(頼政)

コソの下にアレアラメなど受くる其の間に語を略する一種の用法あり。

忍ぶ人のあらむ程こそ(云々ニモ)あらめ(ド)そも又程なく失せて(徒)

花もやう〳〵けしきだつ程こそ(云々ニモ)あれ(ド)折しも雨風うち續き(徒)

此の一節錄し畢ること月も日もこそ(?)あれ七夕なればすなはち孟津抄と名づくるところ然なり

ゴザンナレのことは格の所に說明せり。副格以外に附かぬものなる、ことを忘るべからず八犬傳に「好き敵にこそござんなれ」といふ滑稽あり。

木曾殿さては不便のことをも申すござんなれ誠には汝下りて馬の草などを(平家)

も構へさせよ」とぞ宣ひける(平家)

稻葉は我が領の土產乞ひ受けて奉行頭人に送らん苞苴の料にこそすれござんなれすべき樣こそあれ藩翰譜、京橋高廣の詞)

この白石の文も怪しきものなり。

(3) (古語)呼掛にて呼格名詞に附く。結に關せず。是は(1)の轉用なるべし。今のヤに近し。

我が君こそまづ物聞えむ(枕)

北殿こそ聞き給ふや(源)

花こそといふ文字こそ女の童などの名にしつべけれ(宇拾)

父こそと呼べば忠行何ぞと問へば兒のいはく(今昔)

(4) (古語)**希望**の意にて動詞形容詞の第二變化に附きて**文を結ぶ**。是も強く指して取り立つるよりの轉義なるべし。

鶯の待ちがてにせし梅の花散らず阿利許曾思ふ子が爲(萬)

わたつみの豐旗雲に入日さしこよひの月夜清明己曾(萬)(或は此のコソの下にアキラケクキヨクテリサヤケカリコソ附かざるにもあるべし)

アラメなど略せられたるにて、形容詞には願のコソ附かざるにもあるべし)

大原の古りにし里に妹をおきて吾いねかねつ夢に所見乞(萬)

二十三　や

二十四　か　兩辭感嘆より出でゝ呼掛にも疑にも問にも疑問にも反語にもなる。感嘆と疑問とは其の區別の明瞭ならぬことあり。是此の辭の性質上已むを得ざることなり。

(天)　疑問

(1) **名詞、代名詞、副詞、用言の連用法、順態前提法に附く。**此の係を結ぶ用言は第四變化にてす。

(イ) 主格の外には格を表すテニハの添へるに附く。酒か飲む」など處置格なるは極めて少し。

春や疾き花や遲き　人や來る

誰か在る　春立てば花とや見らむ

何とか言へる　君よりや勝れる

(ロ) 副詞以下のは

君は何時か來たる明日や歸る

人知れず今や今やとちはやぶる神さぶるまで君をこそ待て(新古)

花なき里に住みやならへる　見てのみや人に語らむ

たどりか行かむ文の林を　遲くや見たる

如何ならむいはほの中に住まばかは世の憂きことの聞え來ざらむ(古)

心あてに折らばや折らむ

衣しも多くあらなん取りかへて着なばや君が面わすれせん(萬)

百敷の大宮人は暇あれや梅をかざしてこゝにつどへる(萬)

久方の月の桂も秋はなほ紅葉すればやてりまさるらん(古)

人そしればか今しはなひる

おぼづかなうるまの島の人なれや我が言の葉を知らずがほなる(千)

我がせこに又は逢はじかと思へばか今朝の別のすべなかりつる(萬)

(2) **係とならざるもの**

(イ) **並立格に附けるは下の結に係らず。さてカ**は並べたる中の一つを擇ぶ意ありヤはトカヤラの如く輕く疑ひて其の等類を指す。

我か人かのけしき　茶か麥酒かを飲みたし
後見や何やとかねておぼしかはすとも(竹川)
簫や琵琶や笙の笛篳篥など吹き合せ(榮花)
柚や梨やなどをなつかしげにもたりて食ひ(蜻蛉日記)

(ロ) **副格名詞に附けるもの**ゝ中カのみ

物思ふと過ぐる月日も知らぬ間に「今年も今日に果てぬ」とか聞く(後)
近江にかありといふなるみくりくる人くるしめのつくま江の沼(後拾)
かの人は今日は横濱へか行ける筈なり
「昨日かも霰ふりしか信樂の外山の霞春めきにけり」詞花)は副詞に附けるなるが、此に準ずべし。

(ハ) 疑詞につける中に、是もカのみなるが、稍新し。

誰か來たり　何かの役に立つべし
何處かに行かむ　いづれかを取らむ
何時か見しことあり　何故か時計止れり

(3) **文を結ぶ**

(イ) カのみ名詞に附く。

春雨の降るは涙か
はるゝ夜の星か川邊の螢かも我がすむ方のあまの燒く火か(伊勢物語)

口語方言にはヤにて言ひ切る處もあり。

(ロ) 用言第三變化及終止に準ずべきものにヤつきて

(ハ) 用言第四變化にカつく。

ありや　あるか　なりや　なるか
思ひきや　思ひしか　よしやあしや
早きか晩きか　我をば思ふらむや
涼しやと草むらごとに立ち寄れば暑さぞまさる常夏の花(六帖)
數ならぬ我がみ山べの時鳥木柴がくれの聲は聞ゆや(後)

思ひ出づやみのゝを山の一松契りしことはいつも忘れず(伊勢)
蟋蟀夜寒に秋のなるまゝに弱るか聲の遠ざかりゆく(新古)
多く拾ひ取りたるも嬉しからじや(枕)
心おかれじやは(帚木)

前に助動詞じには疑辭はかのみ附くと言へるは誤なり。

近代、第四變化にもヤを添ふるは、それを終止法と訛りたればなり。

(ニ)(古語)第五變化にもヤカ附く。但メヤの外は稀なり。

古を仰ぎて今を戀ひざらめかも
今更に雪ふらめやも陽炎のもゆる春べとなりにし者を(萬)
母なしに汝生りけめや(紀)
一日も妹を忘れて思へや(萬)
まひなしにたゞ名のるべき花の名なれや(古)
花なれや外山の春の朝ぼらけ嵐にかをる峰の白雲(新勅)
川上やあらふの池の浮萍憂きことあれやくる人もなし(後拾)

此の終の類は前提法に附きて下に「アラン」などを省ける者とも見るべく尚攻究を要す。

(地)感歎　にてはヤの用多くカは少し。

(1)ヤ　**命令法、終止法につく**

なけや鶯　のめや歌へや
有明の月だにあれや時鳥たゞ一聲の行く方も見む(後拾)
かけじや袖のぬれもこそすれ
うらめしや　あさましや
更に筆投げすつべしや(梅枝)
いみじくぞあるや　あはれいと寒しや……(薫ヲ)にほふや薫るやと聞き
にくゝめでさわぐ……形さへ有らまほしかりきや(竹川)

第五變化の終止法に準ずる者亦ヤを添ふることあり。

雨降れば小田のますらを暇あれや苗代水を空に任せて(新古)
あら磯の岩に碎くる波なれやつれなき人にかくる心は(千)
獨寢の夜寒になれる月見れば時しもあれや衣うつ聲(新勅)

(2)**連體語に附く**

(イ)　ヤは領格及連體法に

神風や伊勢　葛城や高間の山　朝倉や木の丸殿

難波津に咲くやこの花　押てるや難波

夕月夜さすや岡べの松の葉の何時とも分かぬ戀もする哉(古)

うつや皷にさそはれて　蟋蟀鳴くや霜夜

燒くや藻鹽の

(ロ)　カは連體法に

行く人を招くか野べの花薄今よひもこゝに旅寢せよとや(忠盛)コノとやノ下ニハ略語アリ」

朝毎に御門にたつの市なれやうるか鮎の子あきな草(世繼歌)

(3)　**名詞について**

(イ)　文を結ぶ。

面白の景色や　有りがたの事や

玉にもぬける春の柳か

とぶむべきものとはなしにはかなくもちる花ごとにたぐふ心か(古)

うつせみの世にも似たるか櫻花さくと見しまにかつちりにけり

(ロ)　ヤのみ呼格をなす場合によりては接尾語風に「金やは……」「坊やも……」などに用う。

蝶や花やとめではやす　嬢や入らっしやい

檀越や然もな言ひそてこら我が課役はたらば汝もなからかむ(萬)

何となく花や紅葉を見る程に春と秋とは幾めぐりしつ(風雅)

此の花や紅葉は並立格と見るべきが、感嘆なるは尚呼格より來たるなり。賴政卿集小侍從が歌に「雪とだに見るべき花のなどやさは雨やみぞれとふらんとすらん」とあるも是なり。「歌や詩」「忠岑や躬恒」などは前に言へる疑の並立なるべく。並立格のヤに二樣ありといふべし。

(4)　**副詞につく。**かは少し。

是に於いてか君子なり　よしや免るとも

さぞやおもしろからん

誠や人は感情によりて動くものなりけり

今や文運隆盛　此の日や天氣晴朗

(5) **ヤのみ**順態假定前提法に附いて**願の意**をなす。(是は希望の助動詞の處に言へり)

さ月來ば鳴きもふりなん時鳥まだしき程の聲を聞かばや(古)

あたら夜の月と花とを同じくはあはれ知れらん人に見せばや(後)

(八) 疑詞とヤカ

(1) **ヤカの別**　極めて言ひ難し。されど其の差の語調に在るは疑ふべからず。ヤは軟に婉曲にて、其の方より言へば意深し。カは硬く急に、其の方より言へば意淺し。此の兩辭はニヌとトツとの關係に相似たり。されば

故郷のならしの岡の時鳥言傳てやりき如何に告げきや(萬)

を「告ゲシカ」又は「カ告ゲシ」といひては全く作者の意と異なる者となる。「思ヒキヤ」を「思ヒシカ」といふも當らず。「月カモ」を「月ヤモ」と言ふは、さる語もなく、よしありとも相應せず。「景色ヤナ」を「景色カナ」といふ時は強き樣なれど意薄く聞ゆ。又ヤカの用法の差ある處よりも推量るべし。ヤは終止を自然に受け、カは連體を體言として受く。ヤは命令に附けど、カは然らず。ヤはニに親しくニヤといひ、その意にてヤラムよりヤラといふ語を作り、カはトに親しく、トカと結合す。又

(2) **疑詞にはカ**を添へてヤを添へざるを本則とす。「イカデカ」「何カ苦シカラム」「誰カ言フ」「イツカ」など最自然なる語調なり。

荒れにけりあはれ幾代の宿なれや住みけんの音づれもせぬ(古)

誰が爲に引きてさらせる布なれや世を經て見れど取る人もなき(古)

さを鹿の妻とふ聲も如何なれや夕は分きて悲しかるらむ(千)

此等のヤは疑詞に附きたる變例の如くなれど、熟考するに然らざるが如し。抑疑詞には疑ふあり問ふにもなれど、唯不定不明の者を大凡にいふ「某」の如きものありて、此は下の結には係らぬなり。前に擧げたる「幾めぐりしつ」の如き是なり。其の外何時解くべしと見えぬ雪かな」「道のくは何處はあれど鹽竈の浦こぐ船の綱手かなしも」(古)、「長濱の眞砂の數も何ならず盡きせず見ゆる君が御代かな」(金)など此の例なり。今右の三歌の如きも、イクタイカの疑詞は下の語に係ることなく、幾代ノ宿ナリトテヤ」「…布ナリトテヤ」「イカナリトテヤ」とやうに、ヤの前に於いて切れたれば、それを普通のヤにて受けたるまでなりと思はる。(「詞の玉の緒」「廣日本文典」の說は異なり)

又

程もなく戀ふる心は何なれや知らでだにこそ年は經にしか(後拾)

山かげに住まぬ心はいかなれや惜まれて入る月もある世に(新古)

此の例なるは「ナルヅ」の意にてヤは感歎なりといふ説もあれど、前例の如く「何ナリ」「イカナリ」と切れたる意味の者に附きたると見る方妥當なるべし。口語「何デス」「何デスカ」「何デスネ」「何デスカネ」など參照すべし。

世の中は如何にやいかに風の音を聞くにも今は物や悲しき(後)

大方はなぞや我が名の惜しからむ昔の妻と人に語らむ(後)

琴の音はなぞやかひなき棚機のあかぬ別を引きし止めねば(拾)

などやかくさも暮れがだき大空ぞ我が待つことは有りと知らずや(千)

梅が香はえるべがほなる春風の誰が行くへともなどや吹き來ぬ(風雅)

いつぞやも花の盛に一目見し木のもとさへや秋はさびしき(總角)

此等の中「イカニヤ」は感嘆なりとし其の他は特例なりと云ふ舊説なれど、愚考には「イカニアリヤ」「ナニゾヤ」「ナニトアリテヤ」とやうに直接に係るにあらで疑詞ありて而も其の意の上にて切れたる者をヤと受けたるにて尋常の疑のヤにて差支なしとすかくておのれは「いづれ勝れり」「我や何なり」などの類も實は奇にあらずとし「何ナリヤ」をも是認する者なり。隨って書簡文に

如何に候ふかは例も無く、且相應せぬ調子なり。「イカヾニ候フ」と切れたるものをヤと受くる更に難なし。「如何哉」といふも「候」を略したるにて不可なし。「何カアル」などやうに疑詞に直に附きて下の語を起す者との區別を見出すはさして難からじをや。萬葉集二の飛鳥皇女殯宮の歌に

何しかも吾が大君の立たせば玉藻の如くころぶせば川藻の如く靡かひしよろしき君が朝宮を忘れ給ふや夕宮をそむき給ふやとあるも「何シ」に直接にカと附き、「ナニシカモ忘レタマフ、ソムキ給フ」と切れたる語をヤと受けたるなり。

何ぞ怪まむや　いかでさる理あるべきや　けむや　きや　きか

此等も從來は感嘆のヤなりと説き來たれど、かゝる場合に疑と嘆とを分つは口端にてこそはせられめ、眞正に區別するは難事なり。恐らくは其の説者とても心の中にては明らめたらじ。口語に「何デアヤシマウカ」「ドウシテソンナ道理ガアラウヤ」と言はむに、其のヤカを疑ならずと分けて心得つべしや。されば我は尚此等も疑とし、

「何ゾ怪マン」「イカデアルベケム」「イカデアルベキ」と切れたるを受けたる者と言はむとす。難者或は「ゑか切れたる疑(反語)文ならば更に疑辭を附する謂なし」と言はむか。然らず。現に此の口語は疑文に更に疑辭を添へたり。文にても「此は何なる」にて意は明なるに、更に「カ」をそへて「何なるか」といふを以て知るべし。疑文は必しも疑辭を要せず、又疑辭をも要せぬものなり。疑辭を添ふるは更に其の意を明にするのみにて實は感嘆よりの變なり。

涙河流す寢覺もあるものを拂ふばかりの露や何なる(後)

聞くやいかに上の空なる風だにもまつに音する習ありとは(新)

忘れぬやゑのぶやいかにあはぬ間の形見ときゝしあけぐれの空(千)

(3) 特例 **疑詞に附くヤ**

春霞立てるやいづこ　主や誰

なども怪むに足らず。皆疑辭として難なし。此等は疑詞に附ける者といふべきにあらず。但「イカニヤ聞ク」「立テルハイヅコヤ」(又イヅコナルヤ)「主ハ誰ヤ」(又誰ナルヤ)は無き例なり。「イカニ聞クヤ」「立テルハ何處ナリヤ」「主ハ誰ナリヤ」は正例なり。「ナリヤ」は「ゾヤ」と同じ。

方言に「何ヤ」「誰ヤ」などいふは「ナリヤ」の義とすれば差支なけれど、今の口語の都べてカを用うるに對して正例にあらず。「何デスヤ」など亦然り。並立格の

何やかや

など疑意ありとする時は此の特例なり。

二十五　よ　親愛呼掛なるはヤに近く、少し指す意のあるはゾに近し。

(1) **名詞に附いて呼格をなし或は文を起し或は結ぶ。**

皆人は花の衣になりぬなり苔の袂よかわきだにせよ(古)

夏草の茂みに生ふるまろ小菅まろがまろ寢よ(ソレ)幾夜經ぬらむ(拾)

今は只そよその事と思ひ出でゝ忘るるばかりの憂きこともがな(後拾)

世の中よ道こそなけれ　定なきこそ世の中よ

あはれ此の卿よ身を捨てゝ國と君とに盡し給ひしかひもなく流離の中に世を去り給ひしぞ痛ましき

舞踏しさわぐよ(枕)　いかに年月の速なるよ

蛛の糸よりも心細さよ　玉の緒よ絶えなばたえね

春の野に生ふるなきなのわびしきは身をつみてだに人のゑらぬよ(拾)

老いにけるよな

連體法に附けるは其を名詞と見たるなり。

(2) **命令法に附く。**

鳴けよ鶯　見よ　おはせよ　行きてよ　賊を討てよの詔

(3) **稀に終止したる語句につく。**

忘れずよ又變らずよ瓦屋の下たく烟下むせびつゝ(後拾)

忘れじよ夢と契りし言の葉は現につらき心なりけり(拾)

思はずよ越えて悔しき逢坂のせき止め難き涙なれとは(續後)

されば(サルナルゾ)よと思ひあはせて(夕顔)　行くぞよ　あるぞとよ

此等は慣用の例ありて隨意に終止にョを添ふること能はず。『心細ショ』『疾ショ』『來ヨ』「スヨ」「ナリヨ」「ケリヨ」などは都べて言はるゝされど口語に

遲くなりますよ　さうですよ

などいふは此の類の用法なり。

(4) (口語ろ　口語に上下一二段サ變の命令法に添ふるロはヨの轉訛にして

テニハなり。萬葉集十六に筑前志賀の泉郎の詠める

荒雄らは妻子のなりをば不念呂(オモハロ)年の八歳を待てど來まさぬ

此の「念ハズロ」のロはヨと聞ゆ。見ロヨなど重ぬるはロのヨなるを忘れて更に添へたるなるべし

二十六　な

感嘆ヨに似て指す意も呼び掛くる語氣もなく、咏むる方強し。モに近きも抑ふる意なし。略今のナネに同じく獨言にも言ひ、人にも言ひ掛け、同意協賛を得むと期待するにも言ふ。すべて文を結ぶ。

(1) **形容詞助動詞(相を除き)の直說終止法、又命令法、或は終止せる語句に附く。**

蟬の聲聞けば悲しな夏衣薄くや人のならんと思へば(古)

人言の頼みがたさは難波なる蘆の裏葉の恨みつべしな(後)

契りきな　あらじな　知らずな

思の外に心憂くこそおはしけれな(葵)

君と思ふらむな(帚木)　我は戀ひむな(萬)　水を賜へな(萬)

とへかしな　移りにけりな　咲きにけらしな

面白の景色やな　されば　見せばやな

思ひてあれな　　宜な〳〵　　彼ぞ婿の少將な

動詞の第三變化に附けるは皆禁止の助動詞にて此處のと紛るゝことなし。萬葉卷一なる「巨勢山のつら〳〵椿つら〳〵に見乍思なこせの春野を」を舊來「見ツヽオモフナ」と訓みたれど、古義に種々誤を正して「見ツヽシヌバナ」と訓みたる、極めて當れる如し。同十四卷なる「相模嶺の小峰見そくし忘れくる妹が名呼びて吾をねしなくな」を舊說「啼く勿」と見たるを、古義には却りて感嘆のなりとせるは如何あらむ。動詞の終止法には此のなのつける例外に見す。

(2) (古語) 動詞第一變化に添ひて希望を表す。是は話者の動作にも他人の動作にも附けて言ふ。

梅の花咲きたる園の青柳をかづらにしつゝ遊び久良佐奈(萬)

玉藻刈りてな(萬)

消殘の雪にあへてる足曳の山橘を苞につみ許奈(萬)

家吉閑(萬)　いざ阿波那我は(紀)

此のナにムを添へたるが希望のナムなりとする說あり。おのれは曩にナムをば助動詞の變種としたれど、此の說も捨てがたし。

(3) (口語) 文語の(1)の外終止動詞にも他語にも附く。

私はな行きませんでしたからな想像は出來ませんな

僕ならやるな　面白いな

命令に「讀ミナ」「御出ナ」「起キナ」など用うるは其の上に「ナサイ」を略せるにてヨミオイデオキは體言なり。

二十七　かな　かも　　是は複合辭なれど一辭の如くに用ゐらるゝによりこゝに擧ぐ。カモは古し。

(1) かと同じ所屬にて感歎を表す。語を結ぶ。

照る月の影きらめきて由比が濱夜しら波の面白きかな(佐々木高行)

大海の磯もとゞろに寄る浪のわれて砕けて裂けて散るかも(實朝)

洋々たるかな水　覺束なくも呼ぶこ鳥かな

年月の射るが如くにおもほゆるかなな

名詞に直に附けるは上にナルなどを略せるなりとも言ふべきが形容詞の語根に附きたる

あはれかな檜原杉原風さびてましらも鳥もかしましきさへ(拾玉)

などは奇癖なり。傚ふべからず。カナは口語ナ又はダナに當る。疑問のカにナを添へて言ふとは異なり。(原始はカナのカにも疑問の意ありしならむ)

(2) **カモは疑問にもなり、文をも起す。**

三笠の山に出でし月かも　戀ひざらめかも
今もかも咲き匂ふらむ　ひとりかも寢む
誰をかも知る人にせむ　否といはむかも
嵐かも今來渡る

古語に「ヲカシカモ」「オムカシカモ」なと形容詞の終止に附ける者あるは變例なり。近文には傚ふべからず。又近頃一部の人の好み用うる「ンカナ」といふ言方は從來は無かりしなるが、此の「ンカモ」と語調似たり。

(3) (古語) 打消のヌを受けて希望の意をなす者あり。

出でゝ行かむ人を止めむ由なきに隣の方に鼻もひぬかも(古)
我が門の一村すゝき刈り飼はん君が手馴の駒も來ぬかな(後)
吉野川行く瀬の早み須臾もよどむことなく在りこせぬかも(萬)

此等は「飽カレヨ」を「飽カレヤハセヌ」などいふ如く、疑問より一轉せるものなり。

二十八　ね

親愛感嘆ほゞナに同じ。

(1) **古語**　第一變化の命令なるに添ふ。

名宣らさね(萬)　榮えいまさね尊き我が君(萬)
島つ鳥鵜飼が伴はや助に來ね(記)
平けく舟出はしぬと親にまをさね(萬)

具して率ておはせね(竹取)

「雨ナ降リソネ」など禁止に附きたるもあるは、今の「フルナヨ」などに近かるべし。

なりをしまさに(萬)

はネの轉なるニにて意は同じ。(完了ヌの命令法なるネに混ずべからず)

(2) **口語**　ナと略同じくして、語氣やゝ沈みたり。而して標準語として獨言にはネを用ゐざるを本體とすべし。ノともノウとも(方言ニイなども)言ふは皆同じ者の分れたるなるべきが、ノはオ列音なる丈落ちつきたる心ちす。

感動詞に「のう我が妻角太ぬし」(八犬傳)など用うるも此の辭の轉にて、俗にナウと音くは如何におぼゆ。もしはナの音便にもあるべきか、いまだ究め得ず。

二十九　が(がも、がな)

是は感嘆のカの轉にもあるべきか。希望を表す。(助動詞の段に說きたれど、體裁上此に重ね記すなり)

(1) **名詞副詞にはモを添へたるに附く。**モは物を緩めて指す意のなり。名詞は主格副格なり。

ふりにし木の實なる時もがな
見る由もがな　とり返す物にもがもや
甲斐がねをね越し山越し吹く風を人にもがもや言傳てやらむ(古)
飛ぶが如くに都へもがな

此等はガの上にナラムセム物セム等の略語あるにやと大槻氏の考へたるもさることなれど、又その下にアレシタシ物セム等と添へても通ずべく、とかく略言には相違あらじ。

(2) **モを添へざる諸種の格なる名詞に附く。**

さらむ人をがな使はむとこそ覺ゆれ(枕)
枕をがなと忍びやかにいふ(千)
何をがな形見に姫に取らせん(今昔)
熊谷あはれ猶よからむ敵がな組んで今一人首取らんと思ひて(盛衰記)
さるべき人の娘がな言ひあはせん(曾我)

芝居にがな行かう　何がなあらうが

此等皆多少ナリトモドモデモなどの義あり。終の二例の如く口語にも用う。但、日ガナ一日などいふハ「日が一日」にてナは離れたる嘆辭、アナタガナハ此デセウといふは「アナタノハ」の意にてガは領格、ナも領格のノの轉なるべし。

(3) **動詞の過去のシを添へたるに附く。**

心憂し深き山にも入りにしが好き(好忠)
秋ならで妻よぶ鹿を聞きしがな(金)
耳無の山の口なし得てしがな思の色の下ぞめにせむ(古)

此のガのみなるは準逆提法と同形なれど、之を結ぶ所にて明に區別すべし。

三十九　かし　終止完結せる語句を輕く抑へて咏嘆す。トヨサなどに通ずるもあり。平安朝以後の辭なり。

とへかしな梅盛なる我が宿を疎きも人は折にこそよれ
見ゆかし　いとをかしかし　あはれなりかし
しか覺ゆるぞかし　さは思ひつかし(桐)　うちひそみぬかし(帚)
おほやけの世繼とぞ言ひ侍りしかし(大鏡)

さかし(帚)　　いざかし(若紫)　　行けかしの仕向(シムケ)

歸れかしに扱ふ

「ユケガシ」など連濁の發音をするは後世の訛なるべし。

三十一　さ　(口語)　ヨカシなどに近く、指定と感嘆との義あり。新しき辭なるべし。完結せる語句にも一語にも附く。

昔あったとさ　　まあ好いさ　　それはだめさ

君がさしっかり御聞きよ　　あれは僕にさ

だからさ行けないってんだよ

地方に因りてはシとも言ふ。同義なり。

さうだし　　今日は雨ふるしい

そないな事は誰もいやだんべし

三十二　を　(古語)　重くるしき強めの感聲にて、體言、命令法連體法に附けるはヨに近し。運用法副詞などに附けるは自動詞に續くヲに似て一種の調子を添ふ。

阿那邇夜志愛袁登古袁(記)

渡守船渡せをと呼ぶ聲の至らねばかも梶の音せぬ(萬)

こゝにてをめせ　　昔も今も知らずとをいはん(右)

こなたにをとてうち解けながら對面し終へり(蜻蛉)

「香をだに句へ」などのヲは此の辭に近けれど、尚(第一)のにてニの變なるべし。ヲヤ、ヲバと續きたるにて、處置格にも準前提法にもあらざるは此の感辭と見るべし。

されば言ひよりにけるをやとほゝ笑まれて(末摘花)

(維盛ノ)今日はかくやつれ果て給へる御有樣かねては思ひ寄らざりしをや(平家)

さる方にて捨てがたきものをばとて式部を見やれば(帚木)

あやしき女だにいみじく聞くめるものをばされればとて(枕、心ゆくもの)

さはあらじものをや

「いはんや人に於いてをや」など用うるのみは今文にも存せり。此のヲヤはサなど代へて可なり。

三十三　い　(古語)　主領格のガに近きもあり、モノヒトに當るもあり。名詞及連體形の體言に附く。一種の感辭なり

吾がせこが跡ふみ求め追ひ行かば紀の關守い止めてむかも(萬)

ありち潟あり慰めて行かめども家なる妹いいぶかしみせん(萬)
否といへど語れ〳〵と詔らせこそ志斐いは奏せ強言とのる(萬)
向つ丘の若楓(カツラ)の木下枝とり花待つい間になげきつるかも(萬)
是を以ちて王たら大臣の子等治め賜ふいし天皇が朝に仕へ奉りし婆々に仕へ奉るにはあるべし……子は祖の心なるいし子にはあるべし(聖武紀)
此を持ついは稱を致し捨つるいは謗を招きつ(孝謙紀)
橘守部の「助辭本義一覽」に「此のイをヤヨの通音にて呼び掛くるより出でたるなりといへる、一種の見解なり。朝鮮語イは主格助辭なれど、それとは異なる樣なり。接尾語風なる所もあるか。

三十四　ゑ（古語）　ヨに似たる感辭なり。口語に「私西京の者どすえ」「何ですえ」などいふも同類なるべし。完結せる者に附く。

山のはに味村さわぎ行くなれど我はさぶしゑ君にしあらねば(萬)
上つ毛の佐野のくくたちをりはやし吾(アレ)は待たむゑことし來ずとも(萬)

三十五　やし（古語）　複合辭にもあるべきか。調子を整ふる感辭と見ゆ。「青丹よしのヨシに似たり。よしゑやし浦はなけども(萬)
大君の帶のしづはた結び垂れ誰やし人もあひ思はなくに(武烈紀)
はしきやし君が使の(萬)
あなにやしふたぎの原(萬)
(ろ)感嘆以外に意義を添ふる者

三十六　のみ

三十七　ばかり　二辭共に單一を表す。

(1) **名詞副詞及動詞形容詞の連體形に**附く。其の連體形は下に體言を含めるなるべし。

我のみ行かむ
音のみ泣く
ひとりのみ眺む
今年のみ散る花ならなくに
をぐらの山は名のみなりけり
「名にめでゝをれる」ばかりぞ

君ばかりは殺さじ
酒ばかり飲む
今日ばかり曇れ近江の鏡山
今年ばかりは墨染に咲け
名ばかり留めおく
彼は「時に遇へる」のみ

人知れぬ大内山の山守は木隠れてのみ月を見るかな

泣いてばっかり居るわいな
そは「言語の巧なる」ばかりぞ

金をたむる〔のみ／ばかり〕にて使はず
白き〔のみ／ばかり〕を擇ぶ

「今來むといひしばかりに
我を知る人は君のみ君を知る人も多くはあらじとぞ思ふ

ノミにて文を結べるは下にナリゾなどある心なり。バカリは下に何ぞありて省かす。漢文讀に用うるノミは「コソ」などに通ふ者多し。是は一に限る意より強く指すことに轉じたるなり。

誤れるのみ　誤れるにこそ

他の辭と併用する時に、其の前後によりて意義の變ること多し。「君ノミヲ思フ」は他の人を思ふことより限り、「君ヲノミ思フ」は他事なく君を思ふにて、「君ヲ思ッテバカリ居ル」なり。「君ヲ思フノミ」は他事にあらず君を思ふ事にて、「君ヲ思フバッカリ」なり。前例の中にても「君ノミナリ」と「誤レルナルノミ（ナリ）」と聞方異なるべく、「名ニメデヽノミヲレルゾ」といひては遍昭が歌には合はずされど又前後の別なき樣なる場合も無きにあらず。「君ノミト遊ブ」「君トノミ遊ブ」は同義にも用うべく異義にも用うべきが如し。而して大體に於いて「君ノミト」は君にかゝり「君トノミ」のノミは「遊ブ」に係る語氣にて最タゞといふ副詞の用に似たり。

(2) ノミは**熟語動詞の中に挿る。**

沖つ浪荒れのみまさる宮の内は（古長歌）
なげきをばこりのみつみて足引の山のかひなくなりぬべらなり（古）
新しき春さへ近くなり行けばふりのみまさる年の雪かな（拾）

此等は多き例にあらず。考ヘテノミ日ヲ暮ス」なども似たる例にて連用法にテを添へたるのみなれど、副詞に成り變れるは此の熟語の中なる者とも見らるれど、テを添ふる所異なれば、まづ副詞に準じて扱へり。虎とのみ用ゐられしは昔（ノミ）にて今は鼠のあな憂よの中」など位置を變へて聞ゆる所前例に似たり。

(3) バカリは**動詞の終止せるにも附く。**是はマデの終止を受くると同じき古き特例なり。

雲居にも通ふ心のおくれねば別ると人に見ゆばかりなり（古）
消え果てゝやみぬばかりか年を經て君をおもひのをるしなければ（後）

(4) **口語はバカリのみ**を用うるを本體とす。

(5) バカリは丈程位等の義に轉じ、**接尾語**となる。是はマデの轉用と同じ趣なり

暁ばかりうきものはなし
三年ばかり研究せり
死ぬばかり思ふ
泣きぬばかりにいふ

ノミには此の用法なきに、

さ　のみ　おもしろからず
かく　ばかり　描き身ながら

などの場合のみは兩者通用するなり。すべてノミバカリの區別を考ふるに、ノミは今のバカリに換ふべく、バカリはダケに換ふべき節あり。又接尾語ならぬバカリは新しく平安朝頃より多く用ゐたりげなる外は、取り立てゝ定めがたし。「あゆひ抄」には「ノミは事の心を主としバカリは物の様を主としていふ」といふ説あれど、むづかし。

三十八　だに　口語にはなし。サヘデモナリトに當る。

三十九　すら　口語同じ。又はモデモナホヤハリ。

四十　さへ　口語には無し。併加のマデ又はカラなどに當る。

此の三辭他の事物を下に對比推量せしめて一つを擧ぐる義あり。而してダニは消極、サヘは積極、スラは**中間**にあり。今の口語とは頗差違あれど、前揭の如く心得れば誤なし。但其の積極と消極となる兩極端のダニサヘへの今は反對に用ゐらるゝ如く、ふと通じ言ふべき節ありと見えて古くも兩傳ある者無きにあらず。

飛鳥川明日谷(ィ左倍)見むと思へやも我が大君の御名忘せぬ(萬)
命だに(ィさへ)あらば見つべき身の果を玄のばん人の無きぞ戀しき(新古)
音にだに(さへ千載)たもとをぬらす時雨かな槇の板屋の夜の寢覺に(金)

此等はダニの方正しきなるべし。

風吹くに雨さへ降る　我すら衣食に苦むに云々
衣食にだに勞せずば結構なり　夢にだに見む
風は吹くとも雨だに降らずば行かむ
烏すら親を養ふことを知る(場合ニヨリテハだにトモさへトモイフベシ)

此の三辭は名詞代名詞副及動詞形容詞などの此等に準すべき者に附く。口語の外は其の下に格に關する辭を添へざる所ノミバカリと趣を異にす。

三輪山をしかも隱すか雲谷裳心あらなむ隱さふべしや(萬)

深草の山煙だに立て　再とだに來べき春かは

はかなきことだにかくこそ侍れ(帚木)

春日すら我が待つ人の來じとだに言はずば明日もなほ賴ままし(貫之)

橘は實さへ花さへその葉さへ枝に霜ふれどいや常磐の樹(萬)(此等カラト當テタシ)

梓弓おして春雨けふ降りぬ明日さへふらば若菜つみてん(古)

月をだに飽かず思ひて寢ぬものを時鳥さへ鳴きしきるかな(六帖)

言問はぬ木すら春さき秋づけば紅葉散らくは常を無みこそ(萬)

瀧の音をいかに聞くらん都すら物あはれなる頃にはあらずや(御堂集)

君すらも誠の道に入りぬなり獨や長きやみに惑はむ(後拾)

鬼すらも都の內と簑笠をぬぎてや今宵人に見ゆらむ(躬恒)

香さへなつかし山吹の花　香をだに匂へ

夜さへ見よと照す月影　夜だに自由の身なれ

「いつよりも曇なき夜の月なれば見る人さへに入り難き哉」(後拾)は副詞をなせる者の如し。貫朝の歌に「物言はぬ四方の獸すらだにもあはれなるかな親の子を思ふな

ど重用せるは奇癖なるべし。土佐日記の「祈り來る風間と思ふをあやなくも鴎さへだに浪と見ゆらん」はサヘタベとある本に從ふべしとの事なり。「恨みわび乾さぬ袖だにあるものを」はアルの上に云々樣と語を入れて見るべし。又ダニのみは熟語動詞の中に挿ることあり。

讀みだに習はず悟ることあるべし

尋ねだに來よ

ダモといふもあり。ダニモの約なるべけれど卑しく聞ゆ。

ノミ以下の五辭、意義を添ふる所は接尾語にも似たれど、さりとて此等をそへて定りたる某詞をなすにあらず、又他辭との關係を表す所も接尾語よりは著しきに因りて、テニヲハに攝したり。固より此等の意義は副詞を用ゐても表し得る者なれどゑかせずしてテニヲハを用うる時は、意味は似てもあれど、言葉は異なるなり。

第二節　複用辭

四十個のテニヲハ大抵他と合せ用うる中に、つのみは全く單用に限る。口語の中の四辭　よ　な　ね　さ　は間投的に、又一塊團と見ては如何なる者の下にも添ふ。之を除外する時は、ども　ど　とも　と(法)　し(法)　なども單用の者なり。口語の

「ケレドモガ」と續くるは妄なり。又なんは他の下には附けど、他辭を添へず。さて他と合するにも、法のテニヲハは他辭の下に、附くまじきこと自然の理なるが、格のは意義に因りて互に上下することあり。コソの如く他の下にのみ結合するものあり、ノミの如く上にも下にも結合するものあり。およそ二個以上のテニヲハの並べる場合を數ふれは三百以上に上る。今その主なるものを上辭によりて次第すれば左の如し。

てにをは結合一覧

が　ノ、ニ、ハ、モ、（上を名詞に見なしてなり。口語のデはニの中に攝す。口語のヨ、ナ、ネ、サはすべて略す。此の類以下一々注せず。）

の　ニ、ヤ（感）

に　ヲ（感）ト、ヨリ（ト、ヨリの上に省略あり）マデ、ハ、モ、ゾ、シ、ナン、コソ、ヤ、カ、テ、ノミ、バカリ、ダニ、サヘ、スラ、

を　ノミ、バカリ、ダニ、サヘ、スラ、ト（上に略あり）マデ、ハ、モ、ゾ、シ、ナン、コソ、ヤ、カ、ノミ、バカリ、ダニ、サヘ、スラ、

で　ト、ヨリ、カラ（以上略あり）ノ、マデ、ハ、モ、ゾ、シ、ナン、コソ、ヤ、カ、テ、ノミ、バカリ、ダニ、サヘ、スラ、

へ　（ト、ヨリ（比較）以上略ノ、マデ、ハ、モ、ゾ、シ、ナン、コソ、ヤ、カ、ノミ、バカリ、ダニ、

と　ガ、ノ、ニ、ヲ、ヘ、ヨリ、カラ、マデ、ハ、モ、ゾ、シ、ナン、コソ、ヤ、カ、テ、ノミ、バカリ、ヨナ、ダニ、サヘ、スラ、ヲ（感）

より　ガ、ニ、ヲ、ト（以上略）ノ、ハ、モ、ゾ、シ、ナン、コソ、ヤ、カ、ノミ、バカリ、ダニ、サヘ、スラ、

から　（ト以下に上略）ハ、モ、ゾ、シ、ナン、コソ、ヤ、カ、ノミ、バカ

まで　ガ、ノ、ニ、ヲ、ト、ヨリ、カラ、（ナ

リ、ダ　ニ、サヘ、スラ、ヨ、

ば　ノ、ゾ、ナン、コソ、ヤ、カ、ノミ、ヨ、

て　ノ、ト、ヨリ、カラ、マデ、バ、ハ、モ、ゾ、シ、ナン、コソ、ヤ、カ、ノミ、バカリ、ダニ、サヘ、スラ、ヨナ、ヲ（感）

つゝ　ハ、モ、ゾ、シ、ナン、コソ、ヤ、カ、ノミ、バカリ、ダニ、サヘ、スラ、ヲ（感）

は　モ、ゾ、シ、ヤ（臨終を今ハといふ時は全く一名詞と變ず）

も　ゾ、コソ、ヤ、カモ、ガ（願ス何時モは名詞に見なさる）

ぞ　ノ、ハ、モ、ヤ、ナ、ヨ、カシ（何處ゾは名詞に見らる）

し　ガ、ノ、ニ、ハ、モ、ゾ、コソ、カ、カモ、

こそ　ハ、「サレバコソナ此の報」などは俗の私造なるべし）

や　ガ（並立のみ）ノ、ハ、モ、ゾ、ナ、

か　ガ（並）ハ、モ、ヤ、ヨ、ナ（何カは名詞に見らるる）

よ　ヤ、ナ、シ、カシ、

かな　ヤ（悲シキカナヤ」など）

ね　ヤ（方言「サウダネヤ」など）

が　ナ、モ、モナ

かし　ナ、

を　バ、ヤ、

い　ハ、モ、シ、ト（此の時イは接尾語の如し）

ゑ　ヤ、ヤシ、

のみ　ばかり　だに　さへ　ガ、ノ、ニ、ヲ、ヘ、ト、ヨリ、カラ、マデ、ハ、モ、ゾ、シ、ナン、コソ、ヤ、カ、ヨ、ダニ、サヘ、スラ、モ、ゾ、ヤ、ガ、ノ、ヲ（以上口語或は方言）ニ、ゾ、コソ、ヤ、モ、

すら　ガ、ノ、ニ、ヲ（以上口語或は方言）モ、ヤ、

（未定稿）

此等の中には口語ならでは用ゐざるも入りたり。古語なるか、尋常ならざるか、又は一ふしあるものは次に例を擧げて少しく説明せん。

一　がに　がは

御てぐらは我がにはあらず天にます豐岡姫の神のみてぐら（神樂歌）

私がは（も）それでない（方言）

二　のが　のの　現代語の外に

いなといへど強ふる志婆のが強語この頃聞かずて朕こひにけり（万）

日の暮に碓氷の山を越ゆる日はせなのが袖もさやに振らしつ（万）

志婆は氏なり。その下にのあるは更に下に嫗君などいふを略せる親愛の語法にてのなきとは大に異なり。略解に貴ぶ意ありといへるは當れるを古義に排したる、中々にひが事なり。今も地方によりては「石川の御父樣が」といふを「石川のが」といふ。それを「石川が」といひては見下したる言樣となるなり。「せな」は「夫」なり。「せなの」といふ時は「夫チャ人」などいふ其の「人」を略せる如き語なり。今は「細いの（筆）の鞘」など、ののと續

けても言へど、昔は之を避けてのがといへるなり。

三　にを　にし(は、ぞ、も)　にこ　により　にまで

命毛のあらむ限は書きつくす筆にをならへ丈夫の伴

思ふにし我が身はやせぬ嘆くにし袖さへぬれぬ(萬)

世の中にあらばぞ人のつらからんと思ふにしもぞ物は悲しき(後拾)

之をば貴君に(上ゲン)と思ひて持ち來れり

貴君に(上グル)より外に上ぐべき人なし(にを略することもあり)

樺太にまで行けり(此のまで到着と併加と兩つの場合あり)

四　をぎて(現代、併加)　をば　をし

舟をしぞ思ふ　此をしも忍ぶべくば

五　とが　とに　こを　とより　とまで　とし　とは　ともとや　とな　とよ

花と月とが第一の眺なり(並主)　花と月との眺

暴風あらむとの警戒　風と雨とに惱む

人はいざ我は無き名の惜しければ昔も今も知らずとをいはむ(古)

花とより外に見えず(略語あり)　急ぐとしもはなけれども

末の代もさるべき人や出でおはしまし難からんとまでこそ見給へりしか(大鏡)

年毎に逢ふとはすれど柵機のあふ夜の數ぞ少かりける(古)

めでたしともめでたし(前節七ノ(3))

この玉は本物にやそれとも硝子にや　此の上とも御願申上候

梅の花ありと(オモヒテ)やこゝに鶯のなく(古)

飛ぶかりがねの數を見よと(イフニ)や(古)

よいよいよおいとなあ　なに來客とな

我妹子がしのびにせよと附けし紐糸になるとも我は解かじとよ(萬)

やよや待て山時鳥言傳てん我世の中に住みわびぬとよ(古)

大宮のぼりに處やは侍りしとよさばかりの事こそ此の世には候はね(大鏡)

夢かとよ見しにもあらぬつらさかな憂きはためしもあらじと思ふに(狹衣)

元暦元年の頃かとよ云々

此度などやらん逃げ憂きぞとよ(平家、頼盛の詞)

却って景親に襲はれぬと覺ゆるぞとよ(盛、頼朝の詞)

乘せまじいぞとよ(七騎落)

だめなんだとよ

とは副格と並主格とあるにて結合にも兩種あり。とには並立のなり。副格のはなし。「とにかく」のとには副格のなれど、此處にてはとは詞詞の代をなせば、此の結合には取らず。古今集なる前のとは下の「すれど」と共に尋常ならず聞ゆるが、スレドをイヘドに代ふれば聞き易きなり。前例のとは尋常の「何トモイハズ」などとは異にて、ナガラの義あり。ソレトモは乍併或又の意。「此ノ上トモ」は「此ノ上ナガラ」と換ふべし。されど其の原義はとはにに通ふ者にて、「ソレニモ關ラズ」「此ノ上ニモ」といふなるべし。となの少し問ひ懸くる意あるは「來客ト云フナ」の意にてトヤトカに通ず。とよは噂する他説と自己の上をいふ自説との二種あり。之を補足すれば「ト人ガイフヨ」「ト我ハ思フヨ」にもあるべきか。更に言へばトにヨと添へて感嘆せるのみなるもあり。其等は後に説く口語のテヤ又ハテヘバに通へり。

六　からが　よりか　よりかも

見たからが氣に食はん(見タ所カラ)

それよりか(も)此方がよい(カを除くべし)

七　ばの　ばや　ばよ

されぱの事にて候ふ

心あてに折らばや折らん

富士山に登らばやと思ひ候ふ

さらばよと別れし時にいはませば我も涙におぼゝれなまし(後)

片岸の松のうきねと忍びしはさればよつひにあらはれにけり(拾)

稱德大嘗會の詔に「汝タチ關ニ仕奉禮方之曾云々」とある、一本之を己に作れどもしぞといふ接續は有るべく覺ゆ。

八　てし　てを　てな　てや

一人だに似てし行かねば(萬)

萩が花散るらむ小野の露霜にぬれてを行かむさ夜はふくとも(古)

君が代も我がよも知らむ岩代の岡の草根をいざ結びてな(萬)

復習してや來つる

口語「おゝてや」「もう歸らうてや」などいふは「云フヤ」の略にてトヨには通へど此の辭

とは異なり。

九　はも　はぞ　はし　ばし

火中に立ちてとひし君はも(記)　我はもよ安見子得たり(萬)

我はぞ戀ふる(萬)　これはし十人の子にていとど五月にさへ生れてむづかしきなり(大鏡序)

遺恨ばし含む　愚なりとばし見給ふや

ばしははしと同じく、バカリをバカシ、バシと略せるとは根本異なるべし。

十　もぞ　もこそ　もな

石橋に生ひ靡ける玉藻もぞ絶ゆれば生ふる、打橋に生ひをゝれる川藻もぞか

るれば生ゆる(萬)　人もぞ來る

忍ぶることのよわりもぞする　葛のうら風(新古)

うつろはで古ばし信太の森を見よかへりもぞする(古)

棚機の久しき程に待ちもこそすれ(古)

現にはさもこそあらめ夢にさへ人目をもると見るがわびしき(古)

音高しもな(萬)　まぎらはしもな(萬)

疑詞に附けるもは合せて一詞の如く扱ひてガノニヲなど添ふ。もぞは奈良時代に

はもの輕きものもあれど、平安以後には必想像「カモ知ラン」といふ意味に用ゐ、下に

はムの想像を略すもこそも下にムなきも皆其の意なり。

十一　ぞの　ぞは　ぞも　ぞや　ぞよ　ぞな

憂き人の月は何ぞのゆかりぞと思ひながらもうち眺めつゝ(新古)

何爲(ス)れぞの者ぞ

かへる山何ぞはありてあるかひは來ても止らぬ名にこそありけれ(古)

あはれてふ常ならぬ世の一ことも如何なる人にかくるものぞは(竹川)

色よりも香こそあはれとおもほゆれ誰が袖ふれし宿の梅ぞも(古)

蚊遣火を間近く立てゝ山がつのおのれ煙にむせぶ何ぞも(堀川百首)

何ぞもぞなどさうどきて(竹川)

いさりせし海人の敎へし何處ぞや島めぐるとて有りといひしは(拾)

何時ぞやも花の盛に一目見し木の本さへや秋はわびしき(總角)

頼むぞよ天照る神の春の日に契りし末の曇なければ(慈鎭)

ぞなは口語に「行ケンゾナ」など用うる地方あり。ぞのは略なると同じ位の語なり。

十二　しが　しの　しに　しは　しも　しこそ　しか

一文字をだに知らぬ者しが足は十文字にふみてぞ遊ぶ(土佐)
誰しの人か之を仰がざらむ　何しに來つる
常に八聲鳴くにしはあらず(奥儀抄)
浦風に物思ふとしはなけれども波のよるこそねられざりけれ(續古)
折しもあれ　必しも然らじ
宜しこそ吾が大君は君のまに聞し給ひて剌竹の大宮こゝと定めけらしも(萬)
何時しか櫻はやも咲かなむ(古)
何しかも見捨て給へる(万)

十三　やの　やは　やも　やぞ　やな

夕されば思ぞ繁き待つ人の來むや來じやの定なければ(後)
散る花の鳴くにし止るものならばわれ鶯に劣らましやは(古)是は反語なり)
世の中は昔よりやはうかりけん我が身ひとつの爲になれるか(古)是は疑のみ)
をのこやも空しかるべき後の世に語りつぐべき名は立たずして(萬)
紫の匂へる妹を憎くあらば人妻ゆゑにわがこひめやも(萬)

こゝにして家やもいづく白雲のたなびく山をこえて來にけり(万)
世の中をうしとら言はゞ片時も在り經なんやぞ忍ぶればこそ(好忠)
あな面白の景色やな　うれしやな(夫木)
やぞは小時期にのみ用ゐしものなり。やよは感動詞としては用ゐれど、助辭としては見えず。

十四　かは　かや　かよ

如何ならん巖の中に住まばかは世の憂きことの聞え來ざらん(古)唯の疑)
聲たえず鳴けや鶯一年に二度とだに來べき春かは(古)反語)
何とかや草の姿はおもほえてあやしく花の名こそ忘れ(拾)
名のりせで梢に來ずば時鳥春かけて來し鳥とかや見む(小大君)
かやのやは咏嘆なりがよといふに似たり。カヨは口語にのみ言ふ。口語に「さうかな」「あ」といふは疑問のかを咏めたるにて文語のかなと異なり。

十五　よや　よな　よし　よかし

助けよや猫また(徒)　知りにけるよな
青丹よし奈良　玉藻よし　勉めよかし

第三篇　文章

第十三章　文

第一節　文

一　文

一個の完結せる思想を表せる語の結付を文といふ。

雨　降る（細な　雨が　しめやかに　降った）

月　清し（十五夜の　月　清く　中天に　照れり）

我は　日本人なり（我は　まづ　日本の　事物を　講究せむ）

の如き是なり。宇宙間有形無形の事物の現象及心に思ふ所皆思想にして、其の分量は單複種々なるが、一つに完結せるを「文」といふ。（文章ともいふべし）此の一個の文には長きあり、短きありて一定せざるが、無量の思想を表すには適宜に之を重ね用うるなり。之を節とも段とも章とも篇とも種々に言ふは修辭學の事にして、文法に於いては唯此の一個の單位の「文」を論ずるなり。

二　文の分解

(1) **二部**　如何なる文も二部に別つことを得。前例の雨月我は日本人なりは文の主部にして降る清し日本人なりは叙述部なり。（括弧内のも準じて知るべし）されど其の二部は更に分解し得るものあり。

(2) **四部**　前例の中天に日本の事物をは叙述部中にありて照れり講究せむの目的なる事物にて之を客部と分つべく、細な十五夜のは雨が月に對して其の意義を修飾するものにて之を修飾部と分つべく、しめやかにはは降ったに清くは照れりに、まづは講究せむに對し、日本のは事物をに對して修飾の用をなす。此の如きを修飾部とす。されば主部の中に修飾部あり、叙述部の中に客部修飾部あることありて、こゝに四部の名を見るなり。

三　文と詞辭

文は固より詞辭の結合ならざるべからず。而して四部は詞又は詞辭の結合せる者より成る。本篇にありて之を「語」と稱す。辭は部をなすこと能はず。

第十四章　四部の成分

四部の成分（文素などゝもいふべし）一語なるあり、二語以上なるあり。今之を三種に

分つ。

第一節　語

一　主語

は主格或は呼格の名詞代名詞或は名詞と同資格なる者にして助辭を添ふるも添へざるもあり。

花こそ　咲け
誰か　自尊の　性を有せざらむ
死するは　易し
正しきが　善し
「あ」は　感嘆の　聲なり
汝　早く　行け

二　叙述語

は動詞形容詞同格の名詞或は其等と同資格なる者なり。(助詞有るも無きも、以下之に倣ふ)前例の咲け易し聲なり等是なり。叙述には肯定あり、否定あり、過去現在未來想像希望あり、疑問あり、命令あり。感歎あり。前の「汝行け」の如きは「汝行く」に比するに、其の主たり叙述たる事實上の意義は固より同じからざれども、文法上は等しく之を主とし叙述とするなり。

花の　色は　移りにけりな
春や　とき
花　遅きか

の如き感嘆疑問の叙述も同樣なり。

夏の　嵐山は　涼しからむ
小倉山の　紅葉　今　一度の　御行　待たなん

の如き、涼し涼しからずは嵐山を叙述するもの、涼しからむは人の心に思ふ所、又待つ待たずは紅葉の叙述、待たなんは人の心に思ふ所にはあれども、嵐山紅葉につきて、それを主として人の思ふ所を叙述すれば、言語の上には尙之を嵐山紅葉を叙述する者と見做し得るなり。否見做し得るにあらず、言語にては然言ひなす者なれば、正しく叙述語と見ざるべからざるなり。

旅は　愉快なり
北風　寒し

金が　入る
雪も　花と　見らる（思はる、疑はる）
春こそ　待たれ

此等も皆人の情意所思等にて他の事物を叙述せるなり。

三　客語

は處置格及副格の名詞代名詞等にして、叙述語に對する直接間接の目的語なり。（「客」といふ語はもと主に對せるなり）前例の中「性を」「御行」「花と」など是なり。

我は　笑ふを　喜ぶ
大なるは　小きに　勝れり
彼の　人の　鼻頭　右へ　曲れり
我は　論より　證據を　取らむ
德　禽獸まで　及ぶ
天川屋義兵衞　男で　ござる

副格名詞なるを補語とか補足語とか名づけて處置格なると區別する人あれど、國語の性質において此の兩種が主語に對するも叙述語に對するも、さる區別を立つべき謂を認めざれば、今之を一括したり。尚後段に詳にすべし。

四　修飾語

は主叙客及他の修飾語に添へて其の意義を修飾する者なり。而して名詞性なる詞に係るは連體法の動詞形容詞及領格同格の名詞代名詞卽連體語にして、動詞性なる語に係るは副詞及前提法の用言卽連用語なり。既出例の中にて細な十五夜の日本の自尊の感歎の夏の小倉山の一度の彼の人の等は連體語にて、それ〳〵主客叙を修飾し、しめやかに淸く早く等は連用語にて叙を修飾し、〻は副詞なれば連用語として一度のといふ修飾語を更に修飾せり。此の外

吹く　風　涼し　譬へば　細き　糸に　似たり
富士の　山は　圓錐の　狀を　なせり
吹かば　飛ばむ

こゝに一言辨せざるべからざる事あり。通俗「修飾」といふ語は、無くても事缺かざるに用うれど、此の文法にて言ふは寧必要成分にて、他語の意義を限定し補足する意味に用うるなり。例へば「雨降ル」と「細ナ雨シメヤカニ降ル」とは事實上には共通する所あれども、二個の修飾語を加ふれば、自ら別文となるが如し。「山ハ狀ヲナセリ」「紅葉

一度の御行待タナン」「人ノ鼻頭右へ曲レリ」等にては殆無意義なるを見れば、所謂修飾語は無くて濟む者にあらざるを悟るべし。四部の成分に輕重を附けて無くても ありぬべき者を修飾語とする時は、「富士の山」といふに、山は修飾的附けたりの者にて富士こそ肝要の主なれといふ如き論に歸すべきが、文法上の詮議は其處まで行き過ぎしむべからず。唯言語の性質いづれか修飾しいづれか修飾せらるゝと判定して修飾語被修飾語を分つべきなり。「机ニ置ク」を「机ノ上ニ置ク」といふ時は「上」の輕きを認むれど、「目ノ前ニアル」を「目ニアル」とは言ふべからざる等の場合を見れば、言語を離れたる事實論は頗見當違なるを發見すべし。かくて修飾語が他の修飾語に係ることあり、又は一個の語に修飾語の二個以上係る必要ある由も了解せらるべし。

枕詞　は總べて修飾語なり。其の中「敷島の」「日本」「吳竹の」「足曳の」「山」など言ふは普通の修飾語と異ならざる語形なるが、「ぬば玉の」「梓弓」などより體言の夜、春、本にも用言の黑き、張る、射るなどにも係るは特例なりとす。そは根本黑キに係るヌバ玉ノは主格、夜に係るは領格、張ル、射ルに係る梓弓は處置格、本に係るは領格、春に係るは用言の音を體言に借りたる者なり。其の他之に準じて知るべし。

五　四部以外の語

文中の語大抵は以上の四部に屬すれども特殊なる文に在りては、四部のいづれにも屬せざる語も無きにあらず。之を四部以外の成分とす。

(1)　**獨立語**　呼格名詞の一部及感動詞は獨立語とす。

太郎や　御前は　水を　撒け

此の文の太郎ヤは「御前ハ水ヲマケ」といふ文を話し懸くる人を呼びたる語にて、下文には言語上關係する所なければ之を獨立語とするなり。之を一方より太郎ヤは御前ハと同じ者なれば此の場合主格と見んとすれば、太郎ヤ御前ヲ打ツゾ」といふ文にては客語となるにて、結局支障を來すなり

瓢や〳〵　我　汝を　愛す

君よ　君は　何故に　憂へ給ふぞ

ほい　此は　何と　した

あはれ　富士や　富士は　日本の　鎭なり

南無三　彼も　やられたか

あゝ　懷しき　故郷　汝も　永く　我を　忘れじ

獨立語が修飾語を取りて獨立部をなすこと往々これ有り。感動詞の獨立語たる由

は前篇第十一章と參照すべし。

(2) **接續語**　他の成分を接續する語は四部以外に屬す。此には術語を命せざるも濟むことあれど、詳しくせむには接續語と言ふべし。前にも說ける如く、我が接續詞は大抵副詞の意義を含む者なれば、中には修飾語と見るべき者もあるなり。前篇第九章第十章を參照すべし。

金剛石　および　ルビーは　日本に　產せず

我は　懷中時計の　側を　白金　或は　銀に　せむ

仁丹　もしくは　淸心丹の　廣告を　見よ

附　**補足語**　といふ名を立つる人あり。其の說一定せざれども、概要次の如し。

(一) 副格の詞を補足語といひて客語と分つは前述の如し。

(二) 叙述語のみにては其の意義完全ならざるを、客語又は修飾語風の語にて之を補足する時、兩者相俟ちて完全なる意義を表す者として、之を補足語と名づけ、客修と分つ。

案ずるに此の說詳しきが如くにして必しも然らず。前篇副詞章の終に說けると似たり。

夜　長く　なれり

淸正　一軍の　將と　なる

我は　彼を　賢く　見る

癖すれば　愚をも　賢に　見る

小生は　大丈夫に　候ふ(候はず)

張良は　大丈夫に　候ふ(候はず)

此等の例に於いてナルミル候フのみにて補足語なき時は義をなさざるは論なしと雖、修飾語もしくは客語なくても義をなさざるは前第四項に說けるが如くなれば、此の如きをのみ補足語と立つるは强ひて葛藤を求むるものなり。此等の語と叙述語とを合して一叙述部と見るは固より不可なけれど、其の爲に客修といふ名を稱すること能はざる理由は萬々これ無し。

(三) **指定助動詞の體言に添ふ時助動詞を叙述語とし、體言を補足語とす。**

正成は　忠臣　なり

此の說によれば、ナリは動詞に準ずべき者、口語デアルと共に一叙語とする價値十分なれど、前例の類にて不完全動詞なれば、體言の補足語を要するなりといふ西洋

流に解すれば最然るべき說なり。されど動詞の完全不完全といふこと、前のナルミル等の外にス思フ言フ願フなど總べて或は完全動詞たり或は不完全動詞たる如く、或る場合には說明の便宜を與ふれど、或る場合には何れとも定め難く邪魔物にもなる者にて、詮じ來るに利害相伴ふものなり。(有對無對單對複對の動詞といふも同樣なり)我は徒に道具立の多きを欲せず、無くて濟む者は無くて濟ませたき者と思ふにより、完全不完全といふ道具を用ゐず。言語は意義をも論ずべきこと勿論なれど、形式と相俟たざるべからざるを忘るべからず。ナリの動詞を含むは論なけれど、我が國語の形式において附屬辭たるは爭ふべからず。特に其の口語デアルを一詞と見るが如きは外人の爲を學ぶより出でたる陋見なり。デは上の體言に附きて格を表す者、アルは獨立動詞なれば、デアルといふ一語は有るべからず。忠臣デ」は客語、「アル」は叙述語と定りて、些も之を動すべき餘地なし。而して此のデアルは文語ニアリに當る者にてナリに當るにあらず。ナリの口語はダ(ナ)なりダの中に動詞を含めばとて、之を一叙述語とせんは現在の語形を輕視するに過ぎたり。從ふべからずかくて我は此の說をも否認し、助動詞は他の詞と合して一語をなす者とす。

更に之を體言の方より見るに、「正成は」を叙述する主要語は「忠臣」にして「ナリ」は之に附屬せる言方なり。(「忠臣ニアリ」といふ言方は然らず)西洋の文は必動詞を要すといへど、國語も漢文も然らず。是に於いて國文の形式は叙述語に因りて三種に分る。動詞的なる、形容詞的なる名詞的なる是なり。名詞を叙述語とすること非論理的なれど、言語は必しも論理に一致する者にあらざるを知る時は、强ひて言語の實際を曲ぐるにも及ばざることなり。

第二節　句

文は最簡單なる者も主と叙とありて、こゝに主叙を備ふれども完結せざる者あり。又完結すれども文の一部をなす者あり。此等を句と稱す。句に中止、修飾、叙述の別あり。

一　中止句

は句の叙述語の中止して、他の成分に從屬せず、相對並立する者をいふ。

鳥　鳴き　花　さく

目　涼しく　口　尋常なり

月　明にして　星　稀なり

夏　過ぎて　秋は　來れり

兄は　大臣　弟は　大將たり

之を裏面より見れば、二個以上の文を一文に平接する時、前なる者を中止句とするなり。さて詞辭の終止中止同形なる者は文か句か紛るゝことあり。左例を判定すべし。

人 あり 我を 訪ふ
運は 天に 在り 牡丹餅は 棚に 在り
笑ふ あり 泣く あり 怒る あり
人も 來ず 手紙も 來ず
我 彼を 恨みず 彼 亦 我を憎まず
財產も なし 手腕も なし
味は 好し 香は 好し

此の終の二例は、形は明に終止すれば二文と見るべき者の如くなれど、其の實、財產も無しだし」「味は好くそれに」といふべき所を、强ひて終止として意義を含めたる者にて、なほ中止句と見るべきなり。（中止句又並立句ともいふべし）

二 修飾句

は修飾部をなす句にして連體的連用的の二種あり。

(1) **形容句** は體言に接續する句にして敘述語は連體法の詞辭なる者なり。

花の 咲かざる 木 なし
水 清き 處には 大魚 住まず
我が 友に 父は 知事なる 人あり
花 なき 枝にも 鶯 なけり
汝 我が 愛讀する 書を 知れりや

「甲斐なき」「情ある」「力ある」「罪深き」「事多き」「耳疾き」「心やすき」などは句とも言はるれど、一熟語と見て可なり。「心にくき」「手輕き」「口重なる」「足ばやの」「人ずくなる」「風だてる」「氣まづき」「心ぐるしき」などは固より熟語なり。（ウラヤマシキウラガナシキの類は一單語とすべし）

形容句の下に語を略せる、又は形容語と其の係る語とを合したる者を名詞句といふ事あり。一便法にて、そのまゝ主客敘或は修と解くなり。前例「花の咲かざる木」「水清き處には」「父は知事なる人」「我が愛讀する書を」及次の例なり。

君が 愛讀するは 歷史ならむ
アメリカは コロンブスの 發見せるなり

人は　壽の　長きを　欲す

父は　知事なる　友人の　妻は　我が　從妹なり

我が　知れる　人の　一家族は　二十人に　上れり

名詞句の修飾部なるは其の係る語を合する時は又名詞句にて、主客叙となり或は獨立部ともなる。

君の　斷行せる　そは　甚　よし

彼の　天晴にも　働ける　事や　我は　之を　天祐と　言はむ

楠公の　七生　賊を　平げむと　いへる　此の　事　妄言に　あらず

此等は**獨立句**といふべし。

(2) **副詞句**　は副詞の如く他の部を修飾する句なり。

水　清ければ　大魚　すまず

花　さかば　我　之を　君に　告げん

聽衆　少けれども　演者　熱心なり

力は　強くとも　術　拙くば　其の人　必しも　勝たじ

古人の　勉めし　如く　我も　勉めむ

副句　形句　副句　修

人の　驚く　位　彼は　敏捷なり

副句　形句　修語

敵は　矢種の　續かむ　限　防ぎたり

副句　形句　修

日　暮れたるに(を、も、が)　途　遠し

風　ふきて　花　ちれり

此の如く叙述語の前提法連用法なる者の外に形容句の體言副詞に合せる者など副詞句をなすなり。こゝに又獨立句と副詞句と混じ易きことあり。「風蕭々として易水寒し」は何ぞ、連用法及がには單に中止すると副詞的に他語に係るとあるにより、その何なるかを見て判定すべきなり。「甲は牛乳を好むに乙は之を嫌ふ」は何ぞ、兄は軍人なるが弟は商人なり

又一文の形をなせる者に副詞句と見るべきあり。

寺の　奥に　額　あり。我　之を　讀まむと　せしも、字は　小し　日は　暮れかゝれり(暮レカヽリタレバ)　遂に　果さずして　歸れり

我　著述に　勉めむと　して　家に　居るに、客は　來る　子供は　騒がし(クテ出來ザレバ)　いで　明日より　旅行せむ

小生　幸　閑暇に　候へば、兼ねての　御相談も　殘り居り候　是非　御入來可被下候

小生も　禁酒致度　存居候　處、御忠告　一々　御尤に　奉存候　今日より　斷然　實行可致候

此等の句その上に副詞句あれば、之を文と見るときは、下には係らぬ事となりて、いたく文義を損す。然れば尚上の句と共に下文に係る者と見ざるべからず。作者の意は「小生閑暇に候。又御相談も候へば」「…存居候處…奉存候に付」といふ樣に二句を併せて副詞的に言ふべきを、修辭上かく變更したる者なり。之を**插入的副詞句**と謂ふべし。句讀法にても此等には。を打たぬなり。又次の如きも副詞句なり。

時は　八月の　末なり　殘暑　なほ　嚴しく云々

我は　思ふ　彼は　いまだ　改心せず

子　曰はく　孝は　德の　本なり

君は　知るべし　彼は　隱君子なり

頃は　二月の　末つ方　空　吹く　風も　寒かりけり

今ぞ　知る　手向の　山は　紅葉の　幣と　ちりかふ　名にこそ　ありけれ(千)

こそを結べる者の前提法なるは固より副詞句なり。

(人)昨日　こそ　早苗　取りしか(ド)　何時の　間に　稻葉　そよぎて　秋風の吹く

人こそ　見えね(ド)　秋は　來にけり

不破數右衞門……其の　身の　刀も　(云々ナルヲ人)　さゝらとこそ　申し候へ(ドソレニモマシテ)　及金は　皆無の　樣にて四五人も　切留候　積に　御座候(大石良雄)

こゝに又事實と記者の情懷想像とを二文に記述せるが、兩者の間に修飾的關係の認めざるべからざる者あり。是また其の一を副詞句と見るべし。

雨　降りたらむ(ト見エ)　路　ぬれたり

我は　今より　勉強せむ、落第の　恐　あり(レバ)

玉の　緒よ　絕えなば　たえね、ながらへば　忍ぶる　ことの　よわりもぞ　する(ニヨリテ)

我は　歸らむ　空　曇り來つ(レバ)

君　心配は　ない　やれ

「小生モ閑に候御出候へ」花サケリ君見ニ來マセ」などは其の間にサレバなどを略せる者として二文と見るべし。又疑問文命令文も副詞句となることあり。

此の　旱天に　雨　ふらむか　農作物は　蘇生すべし

人　我を　愚と　いはむか　我は　愚たらむのみ

形は　惡を　行はざるに　せよ　心中　邪念　あらば(ソノ人)　正しき　人

には　あらず

父にて　候ひし　義重法師が　教へ候ひしは　譬へば　(人)　山越(ゴエ)の　狩を

せよ　又は　かたきに　襲はれよ　深山に　迷ひたらんずる　時は　云

々(平家物語、鷲尾の母)

浪も　立て　風も　吹け　今日の　船出は　止めじ

漢文直譯風なる次の例の如きは好き語遣にあらざれど、なほ副詞句なり。

此の　腰　一たび　屈す(セバ)恐らくは　伸ぶる　期　無けむ

人　心　身　共に　病む(マバ)醫家も　教家も　之を　救ひ得ざらむ

(我)　酔ひて　沙場に　臥す(トモ)君　笑ふ　こと　勿れ

君　今　遠く　去る(ラバ)　我は　孤立せむ

三　叙述句

主叙を備ふる者の更に他の主を叙述する者をいふ。

薩州の　健兒　袖　腕に　至る

我は　兩親　あり

兎は　前足が　短い

隅田川　流　ゆるし

彼　家産　極めて　豐なり

國姓爺　父は　支那人にして　母は　日本人なり

象は　鼻　長し

此等皆一文を成せる者なれども、獨立せずして叙述部をなせば、今之を叙述句と名づけたり。此の如き言方は支那には少し有れども西洋には全く無きより、種々の説も有る中の二三をいはむに、

(1)　**總主說**　健兒、我は、の如き全文の主を總主といひ、袖、兩親の如き句の主を小主と立てたり。此の説通せざるにあらざれども、ありといふ叙述語に對する主に

我はと兩親と二個ありといふこと稍面白からず又第一例の如きは至るに對して・健兒を主とは言ふべからずされば我は叙述部の方より見て叙述句といふなり又強ひて主の方より説を立てむには、我は主補足主など名づけて隅田川を主とし流を補足主といはむと欲す補足主とは即補足語にて「隅田川ゆるし」のみにては足らざる故に流といふを更に補足せる言方と見るなり。

(2) **文主を句主の修飾と見る**　即「彼の家産豊なり」とやうに考ふるも一説なりされど此の文は然様に「家産」を主に言へるにあらざることは明瞭なれば從ふべからず第二例を「我の兩親あり」とせば最甚しく文意を變ずるを見るべし。

(3) **句主を客と見る**　是は西洋流には好くはまるなり象は鼻ヲ長ク持ッ」など總べて言ひ變ふべし而して漢文流にしても「我ハ兩親ヲ有ッ」など當る國語は自動詞的狀態的の言方多く叙述句をなすを其の動詞なるのみは漢文にては他動詞的動作的に言ひなす故に句主は客語となる。されど叙述語の形容詞名詞なるは漢文も我と同じく叙述句をなす其の形容詞名詞なる叙述に對しても此の句主を客語にいひ做すは西洋文の習なり事實上より言へば叙述句の主は文の主に對して客の位に居ることなれば此の説にも一理あれど、それにては我が語性を強ふるこ

となるなり此の國語の特性に就きては詞辭篇中にも處々に説きたれど今此の文主に對する客にして叙述には主となりて係る者の漢文脈と異なる者を類別するに係る三種となる。

私は　近頃　大層　飯が　食へる(「食ガ進ム」「飯ヲ食ヒ得」)
彼　今は　好める　酒も　飲まれず(酒ヲ飲ミ得ズ)
(ワレ)老いぬれば　同じ　事こそ　せられけれ(同ジ事ヲセザルコト能ハズ)
私は　金など　入らぬ(金ヲ要セズ)
君は　あれが　見えるか(アレヲ見得ルカ)
彼は　目こそ　利きたり(目ヲコソ巧ニ活サネ手ヲバ好クハタラカス)
我は　それが　氣の毒なり(ソレヲ悲ム、ソレヲ氣ノ毒ニ思フ)
汝　何ガ　欲シキカ(何ヲ欲スルカ)
おのれは　名こそ　惜しけれ(名ヲコソ惜メ)
君は　何人が　好なりや(何人ヲ好クヤ)

日本の　地方税は　課税の　範圍に　制限法が　設けてあります（制限法ヲ設ケタリ）

諸君は　寄留屆が　出してありますか（屆ヲ出シテ居ルカ）

私も　よき　心地は　致さず候

此の笛は　極めて　よき　音　す

忍ぶる　ことの　よわりもぞ　する

此等の例にて、國語は言方にて客も主となる事を悟るべし。

(4)　**文主を客と見る**　此の說は可能相動詞の叙述語なる又は少數の場合には通せざるにあらず「我ニハ金ガ入ラズ」「我ニ兩親アリ」等の如し。此等は固より客なりされど「我ハ」と言へるに比するに言方の相違ありて、事實のみを以て一律に言ふべからず「我策アリ」と「我ニ策アリ」とは區別せざるべからず。「此ノ笛ニヨキ音ス」象ニハ鼻長シ」など日本語とは聞かれざるなり。又處置格の客語とも見ゆるは

酒は　我　飲ます

うそは　私は　申しません

箱根は　君　見たりや

藏書は　彼　已に　賣り拂へり

などの場合なり、されど彼等も「酒ハ我之ヲ飲マズ」とやうに叙述句の中に客語を省略せる者にて、文義上「我君」などは句主、「箱根藏書」などは文主たること爭ふべからず。「君箱根ヲ見タリヤ」の如く言ふとは異なるなり。

(5)　**文主を叙述の修飾と見る**　說あり。「鼻ハ象ニオイテハ長シ」「彼ニオイテハ天氣好シ」の「今日ハ」の修飾なるなど聯想しても、妥當なる如くも思はるれど、ニ於イテと場所の如く言ひ做し得るは此の場合のみにあらず。「我ハ惡シキコトヲセズ」の如き純然たる主語の「我ハ」も、「我ニオイテハ」「我ナラバ」と言ひ得べきにて、實は尋常平凡の事なれば、それ無きと有るとを一にするは不可なり。今日ハは副詞にも名詞にもなる詞なれば同列には論ずべからず。又「智者モ千慮ニ一失アリ」などの文主のモをふめる者は「智者トイヘドモ」とやうに修飾にも聞ゆれど然らず。次の如く說くべきなり。

金剛石も　磨かずば　玉の　光は　そはざらん

主　修　叙　主　叙句

こゝに西洋文に比して考ふべきことあり「今日ハ天氣好シ」の文主は果して天氣な

りや。その意ならば「天氣今日ハ好シ」と同じきか。今日といふ語は文主たり得ざるか。

今日ハ何月何日ナリ」といふ時は文主なるにあらずや。「今日ハ日ハ云々」とやうに西洋流に主語を補足する必要は國語に無し。少し變りて季節の名などは副詞にもなれど、まさしく名詞にもなりて、「春ハ花サク」「秋ハ實ナル」など、明に春秋を文主としてそれを叙述せるを見る時は、前の今日ハも文主とするが適當なるべし。「天氣今日ハ好シ」とは別義なり。又「胸中百萬ノ兵アリ」の胸中を主と誤るべからず。此は固より胸中ニの義にて其の上に我といふ主あるなり。凡上下左右内外など副詞的なる名詞は主にも客にもなれど、場所の副詞と見てよきこともあり、こゝのも胸中ニとして修飾語とも客語とも見らるゝなり。(「其の人の心の中如何にすぐしかりけん」などは主なり)

(6) 句主を修飾と見る

米の一年の産額　平均が　四千萬石なり

半紙一帖の價　上等が　四錢なり

我が嗜好する物　第一が　煙草なり

彼の學資　半は　借金なり(半ハ之ヲ人ヨリ借ル)

懐中金　十圓札　三枚、銀貨　銅貨　取交せ　一圓餘　あり

此等の例を「産額平均何程」「上等ノ所ニテ」「第一ニ」「學資ハ半借金ナリ」「十圓札ニテ三十圓」など言ひ換ふる時は正に修飾語なれば、それと似たる此の場合も準じて解くべきかと思ひよるはさることなれど、更に思ふに、異なるふしあり。此の例なるは、語脈を變へずして詳しく言ふ時は「平均額ガ」「上等ノ半紙ガ」「第一ノ嗜好物ガ」「學資ノ半ハ」「十圓札ノ數」となるべく何處までも主語たるを免れざるなり。尚左例を見るべし。

彼　始は　勉めたり(副詞、修飾)

何事も　始が　大事なり(名詞、叙述句ノ主)

始を　愼めば　事　終　あり(名詞、文主)

こゝに前述の諸説を再記すれば左の如し。

我は　兩親　あり　(主　叙句)

我は　兩親　あり　(主　叙)

我　兩親　あり　(修主　叙)

我　兩親　あり　(修主　叙)

我は　兩親　あり　(修　主叙)

我は　兩親　あり　(總主　小主(補主)　叙)

我は　兩親　あり　(客　主　叙)

我　兩親　あり　(客　主　叙)

我は　兩親　あり　(主　客　叙)

主 修 叙
我 兩親は あり

叙述句を疊み用ゐたる文あり。漢文直譯體などに馴れたる目には、いぶかしく思ふべけれど、正しき我が語脈なり。

昔の士族の 子弟は 父兄が 教育 ありき
君は 細君が 御父樣が 金が 有る
彼の 人は 鼻が 先が 曲つてゐる
櫻は 花こそ 見所は あれ
北國は 山は 雪 まだ 消えず

禹は 吾 間然する こと 無し

二重以上の叙述句は混亂し易ければ多くは用ゐず。又此等の中には「子弟ノ父兄ガ」「細君ノ御父樣ガ」「鼻ノ先ガ」の如く言ひても同じ樣に思はるゝものもあれど、(2)說の如く尙差異あるなり。

叙述語が中止又は連體連用となる時は修飾語となるが如く、叙述句を有する文も亦其の句尾を變ずれば中止句とも形容句とも副詞句ともなる。

正成 誠忠 萬世に 輝き 良雄 義烈 千古を 照す
狂風 聲は 猛虎の 吼ゆるが 如く 怒濤 響は 萬雷の 轟くに 似たり
里は 雪も 消えたる 街道を 荷車 ひく 男 あり
花は 先の 尖りたる 者も あり
櫻は 花こそ 見所は あれ 木立 にくげなり
東京市長問題は……なりしが 尾崎 千家 兩男爵家の 婚約 成立したる 結果なるべし 極めて 圓滿なる 解決を 見むと するに 至れ

かくて又叙述句は連體に用うれば形容句に、連用には副詞句になるを見るべし。「誠忠萬世ニ輝ク正成」「聲ハ猛虎ノ吼ユルガ如キ狂風」「雪モ消エタル里」など變換し試むべし。さて又漢文直譯より出でたる

色は　即　是　空なり
小生　差支　これ　あり
貴君　御構　これ　なく候ふや
桓魋　それ　我を　いかに　せむ

等も叙述句といふべし。漢文にて是は動詞ともいふ人あれど尚代名詞主格なり。「有之」「無之」の之は漢文に擬したる誤用にして彼にありては客なれど、我には主となるなり。「差支有之」「御構無之」を一叙述部と見るは誰しも論なき所なるが、形式上は句と言はざるべからず。かくて二重叙述句となるなり。或は色は差支御構の類若しくはコレソレを獨立語とも見るべきか。なほ後に言ふ並置にはあらざるなり。

第三節　小句

句の主語なき者にして、叙述語と客語又は修飾語等と結合したる者を小句といふ。

小句の種類は句に準ず。

一　中止小句

は他の小句と相並びて用ゐられ、それと同部をなす。

酒を　酌み　詩を　吟ずる　人　あり
我　山に　入り　野を　わたる
彼　美く　遊び　善く　勉む
花を　取り　枝を　折るは　禁制なり

凡小句は強ひて其の名目を立てずしても可なれど、又便宜あることもあるなり。

二　形容小句

即連體的修飾小句

富士山に　登る　者　年々　多し
親に　孝を　盡す　人は　君に　忠なる　人なり
日本より　好き　國　あらむや
彼は　何と　なき　物思を　す
音に　聞く　高師の　濱
彼は　親にも　勝る　背高なり

善く　泳ぐ　者は　水に　溺る

彼の　家に　ポチと　いふ　犬　あり

鶯は　面白く　囀る　鳥なり

そは　頗る　大なる　罪なり

彼の　母なる　人は　我が　叔母なり

我が師　なる　君は　善く　人を　致へ給へり

我　百世の　師たる　孔子を　思ふ

花の　如き（様なる）顔も　いつしか　衰ふ

西人　百行の　基なる　孝を　知らず

「我ガ家ノ法」「父ノ兄ノ子」「水ノ上ノ月」など同種の修飾語の重れるは小句と稱する要なし。但「我ガ家ノ子」と「我ガ家ノ子」「大理石ノ机ノ脚」と「大理石ノ机ノ脚」「赤キ衣ノ裾」と「赤キ衣ノ裾」などは解剖に當りて適宜に區別するがよし。

形容小句の名詞と合せるか、略せるを名詞小句といふこと名詞句の例に準ず。

書を　よむは　樂し

汝　利よりも　大なる　者を　思へ

好く　言ふは　好く　行はざる　證と　なるべきか

一旦　忘れたる　事も　時々　想ひ起す

前に　擧げたる、修飾語と結合せる名詞「我が家」又は「美しき花」の如きは某部とは稱すべけれど、名詞小句とは言はず。

三　副詞小句　即連用的修飾小句

我　子を　持ちて　始めて　親の　恩を　知れり

彼　自說を　主張して　人に　屈せず

月に　對して　誰か　古人を　忍びざらむ

人は　足　して　歩む

彼　病氣に　因りて　來らず

富貴　我に　於いて　浮雲の　如し

（我等）天に　在りては　比翼の　鳥と　ならむ

智者と　いへども　千慮には　一失　有るべし

彼と　云ひ　此と　云ひ　不埒なる　事のみなり

某氏は　何と　なく　慕はし

來る　者　老幼と　いはず　男女と　云はず　皆　其の　德に　服す

汝　何を　以て　之を　謂ふ

そは　君に　取りて　一打撃ならむ

張良　かつて　黄石公に　就きて　學べり

金言は　誦するに　隨ひ　益　其の　妙を　增す

遥羅の　人頭稅　一人に　つき　六圓なり

公　人と　爲り　至孝なり

孔子　相と　なるや　三日に　して　少正卯を　斬れり

君子の　心は　水の　如く　淡し

彼は　讀むと　同時に　筆記す

能因　都をば　霞と　共に　出でたり

あゝ　我　誰と　共にか　昔を　語らむ

瀨を　はやみ　水　岩に　せかるる

山　高み　人は　すさめず

清涼殿に　鳴板と　て　鶯張の　板敷　あり

其の　人　恣ばらく　ありて　又　口を　開けり

汝　よく　考へて　事に　當れ

彼　一度は　非常に　苦みしかど　今は　成功せり

君　急ぎて　行かば　間に　合ふべし

人　書を　讀むとも　思量を　粗に　せば　益を　得じ

人を　殺せば　己も　殺さる

「霞ト共ニ」は客と修との聯結とも思はるれど、こゝにては「都ヲ出ヅルコト霞ト共ナリ」とやうなる言方にて共ニをば叙述語の修飾語に轉じたる者と見、その霞トに係るところより客叙の結合としたり。「山高ミ」の山は主語かとも思はるれど、前に副詞の章に言へる如く處置格の客語と見たり。「鳴板トテ」の類、テの上に動詞を含めば略したる場合にても副詞小句と見るなり。ト（思ヒテ）　打つべからず　負けじと（シテ）　爭ふ　の類も同じ。其のテをも略して

など言ふは、一語にて副詞即修飾語と見らるるも可なり。凡小句は主語なきより言へる名なるが、其の主語は補ひて聞ゆる場合も少からず、前提的に係る時に殊に多し。

富貴（我　ソレヲ）我に　於いて　浮雲の　如し

（人）禮服を　着ざれば（我ソノ人ヲ）入れず

の如き、主語を補へば副詞句となる。之を理論一方より言ふ時は如何なる叙述語も必主語を見出し得べけれど、常識にて主語なき者と見たるをば小句と定めて可なり。或は學修の進境に從ひて省略の補塡をするも可なり。中止小句形容小句においても此の事あれど、彼にありては主たるべき語その直下に來る者多く、言語の上にては之を補塡すること却つてふさはしからざることあり。是西洋文などにては關係代名詞を用ゐて

（ソコニ人其ノ人ハ）酒を　酌み　詩を吟ずる　人が　ある

（人ソノ人ハ）彼の　母なる（所ノ）人は　云々

といふやうに言ひなす所なり。

修飾語の他の修飾語と結合したる者にして副詞小句と見るべき者あり。是は小句の定義に適はざれど、こゝに附記す。

三月の　三日　雪　降りし　事　あり

彼の　事　君の　説の　通　確定せり

ある　時は　我　原稿紙にも　窮せり

彼も　長き　間　流浪せり

賴盛は　賴朝の　爲には　恩人なり

臣は　君の　爲に　忠を　盡す

此の種の副詞小句の連體なるは形容小句といふべし。

返す　時の　闇魔顏は　誰しも　免れじ

長き（副小形）間の　流浪にて　我は　困難せり

己の　爲の　謀こそ　第一なれ

文の形をなしたる副詞句の主なき者亦副詞小句といふべし。次例など強ひて主語を補塡して句とするには及ばず。

梶原　たばかられぬとや　思ひけむ　續いて　馬を乘り入れたり

好意にも　せよ　其は　失禮なり

酒を　飮まむか　我は　伊丹の　劒菱を　擇ばむ

土足を　頭に　加ふ（レバ）匹夫も　必　怒る

人を　殺す（ニ吾人）劒のみを　用ゐじ

任に　赴くや　否や　管下を　巡視せり
變を　聞くや　否や　彼ハ　蹶起したり

四　叙述小句

は客或は修と叙述語と結合せる者をいふ。然れども右の如き場合に小句といふ名目を用うる必要はまづ無きことなるが、叙述句の主を略せる者にて通常その省略の認識せられざる者などは、簡單に叙述小句といひて説明すれば心得易きこと、形容小句副詞小句の場合の如し。

玄徳　孔明を　訪ふ　（主　叙小　客　叙）
關羽　張飛　善く　戰ふ　（叙　叙小　修　叙）　此　述部といひて足れり。

此等は各語を解けば可なり。二語を結合しても叙

京都は（人）　天子の　居る　處を　いふ　（主　形句　主　叙　名句　客　叙小　叙）
大國主神　又の　名を　八千矛神と　申す

第四節　引用

語、句、文が其の儘に他の文の成分に用ゐらるゝ時、之を引用といふ。記者が人の言葉を記すにも、自己の言説にも、或は事を設けても此の法を用う。之を挿入ともいふべし。引用挿入は客に多けれども、それに限りたるにはあらず。

「孔子閒居曾子侍坐」は　玄宗の　御筆孝經には　「孔子居曾子坐」と　あり
いろは歌の　終は　「ゑひもせず」なり

机は（人之ヲ）　木に（ヨリ）　て　造る　（叙小　叙句　叙小）
筆が　（人之ヲ）　並べて　ある　（副句　叙小）

訴狀が　もう　出して　ある
君の　事業は　（吾人）　近く　成功を　見るべし
イフ　申ス　造ル　並べ出シ見ル　等の主は　京都大國主　机筆訴狀事業等にあらざるは明なれば、眞の主を補ふか又は叙述小句として説かざるべからざるなり。尚後章「省略」の段に參照すべし。

「籠もよみこもちの」の　歌は　萬葉集の　最初に　あり

誰か　謂ふ「文武　兼ね難し」と

「大博覽會　延期に　定れり」と　いふ

「秋の　夜は　長い　もの」とは　まん圓な　月　見ぬ　人の　心かも

黒田　如水は　かつて「草履　かた〳〵　下駄　片方に　て　事に　赴く

心懸　肝要なり」と　いへり「石橋を　叩いて　渡る」との　對照　面白し

「子を　持ちて　知る　親の　恩」は　文なりや

「行け」は「行く」の　命令　或は「行ける」の　連用なり

「コソの　結は　ケレぞ」と　いふは「日本の　紙巻煙草は　敷島なり」と　いはんが　如し

引用挿入を明瞭にせむとて鉤（カギ）「」を符號として用うること今行はるゝは然るべきことなり。されど「アト驚ク」「ヤト叫ブ」「ウント言フ」「イナト答ヘヨ」「承知トテ歸レリ」「今年ハ上作ダト」其の他うるさき場合には用ゐざるも却って可なり。引用には又ダッシを用うることもあり。

引用の重複する時は二重鉤『』を用う。されど三重以上には定れる符號なし。

『詩に「戰々　兢々として　云々と」あるを　孔子の　孝子の　心に　譬へたるは　違へり』と　我が　師　諭されき

『昔を　今に』と　うたひけん　様調と　いふ

『籔蛇と　いふ　語を「籔を　つゝいて　蛇を　出す」の　意味に　いふは　無理なり』と　さる　人　いひし　如何　あるべき」と　我　此の頃　人に　問はれたり

引用　挿入のトイフをヲイフなどゝ變ふれば尋常の文となる。これは時代にも因り修辭上の都合にも因りて、いづれをも用うるなり。

名句

人　大博覽會　延期に　定れるを　いふ

我　神恩を　誠に　有り難く　有り難しと　思ふ

の　有り難きを

「暑中休暇には　海水浴を　したり」など（ト）

したる　事など（ヲ）　語る

彼の　人　卒業後は　更に　遠く　遊學せむ（と）（事を）　願へり

引用挿入の句小句など修飾部となる時は前述の副詞句又は形容句等となるなり。

（佐々木四郎高綱は）姨母に　附きて　都の　東　吉田邊に　在りければ　世に　隨ふ　習なり　平家に　奉公も　すべかりけれども　思ひけるは

「父　秀義は　故　六條判官　爲義に　父子の　義を　なされて　代々　一門の　好を　なす　淵は　瀬と　なる　世の　中なり　ある　樣　あらんずらん」と　て　姨母に　養はれて　居たりけるが（盛）

さらでも　さかしき　峭づたひを　道しるべする　山人の　笠は　重し　呉山の　雪靴は　香し　楚地の　花　肩上の　笠には　無影の　月を　傾け　擔頭の　柴には　不香の　花を　手折りつゝ　歸る　姿や　山人の　笠も　薪も　埋れて　雪こそ　くだれ　谷の　道を　たどり〳〵　歸り來て　柴の　庵に　着きにけり（謠曲葛城）

君ならで　誰にか　見せん　我が　宿の　梅は　今日こそ　盛なりけれ（連體句に用ゐたり）

知る　人ぞ　知る　色も　香も　世に　類　なき　名花とかや

論より　證據　これは　どうだ

第十五章　成分の用法

第一節　成分の並置

文の各成分は一個に限らず二個以上並置せらるゝことも多し。前章中にも其の例あれど今各部の語句小句等に就いて更に其の例を擧ぐべし。

一　主部

風も　雨も　穩なり

五日の　風も　十日の　雨も　時に　順ふ

飯を　食ふが　肉體を　保つが　汝の　目的か

何の　罪の　錯の　あれば　かく　翁をば　歌に　作りては　歌ふべきぞ（今昔物語）

風の　散す　雲の　かゝる　皆　花と　月との　美を　助く

（權ヲ）握る　手の　節の　隆きは　眞黒きは　松の小枝に　青筋　立てゝ

うんと　かく　力の　脈を　通はせた　樣に　見える(廣美人草)

水と　空と　同じ　色に　見ゆ

桔梗　女郎花　龍膽　地楡などは　秋の　草なり

二　叙述部

梅は　苦く　酸し

君の　眼は　圓く　太し

彼　來て　歸れり

此の　人　善く　飲み　善く　談る

我　茶を　好み　酒を　嗜む

田村麿　目は　蒼集の　如く　鬚は　銀線の　如し

「雨　降れど　降らねど」　濡るゝ　我が　袖の　かゝる　思に　乾かぬや　なぞ(後)

「己が　好みて　望みて」　うけたまはるかは(今昔)

我　昨日　上野公園を　見　博物館　動物園をも　見　東照宮を　拜し　辨天に　詣でたり

武藏野の　秋を　さやけみ　妹と　われ　野べの　小路を　行きつ　もどりつ

公は　實に　當代の　功臣　百世の　龜鑑なり

義は　宜なり　行って　宜しく　するを　いふ

其の　人　美目　盼たり　巧笑　倩たり

槍の　權三は　伊達者で　ござる　油壺から　出た　樣な　男　しんとろとろりと　見とれる男(以上一文)　どうでも　權三は　好い　男　花の　枝から　こぼれる　男　しんとろとろりと　見とれる　男　いとしい　男(近松)

勝間田の　池は　我　知る　蓮　なし　しか　いふ　君が　鬚　なきが　ごと(萬)(「我シル」は副詞句とも見るべきか)

三　客部

副格名詞と處置格のと並置せらるゝは論なきが、其の外にも同種の客の並置は甚多し。

諸子　明日　紙と　筆とを　持ち來れ

色をも　香をも　知る　人ぞ　知る

春は　來れり　野に　山に　うんとか　すんとか　何とか　言へ

天にも　地にも　此は　たゞ　ひとつ　あり

枕より　跡より　戀の　せめ來れば　せん　方　無みぞ　床中に　をる(古)

杖とも　柱とも　たのむ　藤原の　龍麿　今年　む月ばかり　身まかれりけるに　その　墓に　高松

山と　いふ　所に　詣でゝ　花など　手向けて(岡部日記)

順子も　其の　支度を　急いで　藥品から　滋養品から　婦人は　うるさ

き　頭の　物　化粧の　品々　までに　細に　整へて　愈　明日　立てるま

でに　荷物を　拵へた(こぶし)

ちり　ちらず　聞かまほしきを　故里の　花　見て　歸る　人も　逢はな

む(拾)

春や　とき　花や　おそきと　聞き分かん　鶯だにも　鳴かずも　あるか

な(古)

四　修飾部

戀しき　我が　母は　鄉里に　いま　あらじ(以上副詞句)　さける　さかざる

高き　卑しき　身分　あり

春の　色の　到り　到らぬ　里は　なし

花の　見ゆらむ(古)

行く　歸る　友を　送り　迎ふ

流るゝ　この　水は　休む　こと

清く　赤き　心を　みがけ

君　浮き　沈む　木の葉　石の　性を　見よ

遲く　疾く　己が　樣々　さく　花も　ひとつ　二葉の　春の　若草(定家)

汝　明日も　必　來れ

行けど　ゆけど　ゆけども　盡きず　小松原

答案　今　纔に　成れり

茜さす　紫野　行き　標野　ゆき　野守は　見ずや　君が　袖　ふる額田女王)

御恵投の　金子　仰に　任せ　甚　如何ながら　有りがたく　拝受仕候

此等二個以上の修飾語が他の一語に係れる者にて、並置の本體なり。通例「我ガ思フ人」などいふ時は「我ガ思フ」は形容句にして並修にはあらず。「高ク卑シキ人」は並置なれど同一人の位高くして心卑しきをいひ、「高キ卑シキ人」は高き人と卑しき人とをいふ區別注意すべし。「行ク歸ル」は「浮キ沈ム」の如く「行キ歸ル」ともいふべく、此の場合には兩種の語法あるなり。「商人タリ軍人タル我ガ二弟」なども前のは中止なり。其の中止形又は他の連體形を略しては

教員　判事たる　我が　二兄　云々

英　佛の　事情は　我に　知られたり

日本　支那の　文明は　同じきも　異なるも　あり

といひ、ノを一々にそふるは却って特殊の場合の如くなれり。

唐の　大和の　物語は　事　ふるし

奈良の　京都の　樂しかりし　漫遊を　思ふ

前に形容小句の段に言へる如く、逐次的に一より二、二より三へ係れるを並置とは言ふべからず。「我ガ國ノ人」「君ガ家ノ兄弟」などの外

あまり　甘き　菓子は　我　好まず

極めて　美しく　咲ける　花　盜まれたり

急ぎに　急ぎて　行け

など皆並置にあらず。左例の成分を解きつゝ並置を指摘すべし。

屋根は　萱の　床下は　石の　家を　建てむ

前途の　目的だに　慥ならば　一時は　乞食を　すとも　我は　厭はず

葛の葉　口を　もって　筆を　くはへて　字を　書く

我　一日を　煙草を　吸ひ　茶を　飲みて　暮せり

體溫　下らず　食氣　進まずば　かの　病人　危からむ

汝　家に　在りても　外に　出でゝも　我が　此の　訓誡を　忘れずば

まづ　當分　甚しく　身を　害する　こと　無からむ

君　來ずば　ねやへも　入らじ　こむらさき　我が　元結に　霜は　たく

とも（古）

五　獨立部

も亦並置せらる

虞や〳〵　汝を　いかに　せむ
水　水　水を　持って　來い
さかまく　大浪　しのつく　氷雨　それも　物かは
山を　拔くべき　力も　折れぬ　あはれ　たをやめ　あはれ　我が　駒
諸君よ　諸君　諸君は　今の　時勢を　何と　御覽に　なりますか
あゝ　一代の　寵兒　亂世の　英雄　汝も　姣兎　死すれば　良狗　煮ら
るゝに　免れざるか

第二節　成分の位置

成分の位置言ひ易きが如くなれど、實は然らず。

一　正置

尋常普通の文は大抵主客叙と次第し、修飾部は被修部の上に、獨立部は文の始に在り。

修	主	修	客	修	客	修	叙
	子ども						立てり

小き	子ども		庭に				集れり
小き	子ども		庭に			樂しく	遊べり
怜悧なる	子	白き	紙に	黑き	馬を	巧に	書けり

獨　修　主　叙
あはれ　いにしへ　ありき　てふ　人麿こそは　戀しけれ
修　客　叙　叙

修　主　叙
暑さ　往けば　寒さ　來る
主　叙

修　主　叙
とかく　氣候　不順なり

修飾部の一文に係るは其の全體の上に在るべきこと論なし。さて二個以上の修飾語の重る時は、いかに之を次第するぞといふことは頗判じ難きが、まづ被修と最密接なる者を最近く置くが正當なるべく、細なる事に至りては修辭上の問題たるべし。左例の如きは其の位置を變じ得ること勿論なれど、正置にあらずとは定めがたし。

君　來すば　ねやへも　入らじ　こ紫　わが　元結に　霜は　おくとも(古)

小鹿 鳴く この 山里の さがなれば 悲しかりける 秋の 夕暮(夫木)

道徳的 二個以上の 事項

金米糖を 入れたる 染付の 古南京の 目ざましき 一個の 壺

ある なまけものゝ 學生の 佐藤と いふ 者

生唆 磨墨と いふ かの 二匹の 頼朝の 愛馬は 少壯なる 譜第の

郎黨 佐々木 梶原の 二人に 與へられたり

二 倒置

は修辭上の變なり。その場合には倒置せる方適當なる者なるが、前項の正置に對して之を倒置といふなり。倒置は、(一)主要なる語句をまづ始に提示すると、(二)密接なる語句を相接近せしむる事と、(三)音調を整ふるなどより起る。

(1) 叙述部を始に置くもの

やよや 待て 山時鳥

美なるかな 山河の 固

そいつは 御免だ 僕は

今日よりは かへり見 なくて 大君の 醜の 御楯と 出で立つ 我は

吹きよふ 野風を 寒み 秋萩の うつりも行くか 人の心の(古)

見よ 君 現下の 形勢を

とまれよ 喋々

聲 絶えず 啼けや 鶯

何だ 何だ それは

(2) 客部を始に置くもの

かういふ 説で 彼の 人は あった

竹に 昔は(人) 物を 記したりき

それを あなた どう なさいました

君に 二心 我が あらめやも

ゆゝしき 者にて 義朝 ありけり(愚管抄)

「縁 なき 衆生は 度し難し」と 釋迦は 説けり

云々と 甲 問へば 乙 答ふ

「我ガアラメヤモ」の類は主叙を接近せしめ、且は主要なる客部を前に出せるなり。「我アニ君ニ二心アラムヤ」といふ文と比照すべし。「義朝アリケリ」は義朝といふ主を略

せんとして言ひ出したるが思ひつきたる様に挿入的に主を後廻」に入れたるなるべし。ト思フト云フの場合、今の漢文直譯調なるは客部を主の後、叙の前に正置すれど、其の客部長きときは極めて心得にくし、その長き客部が一文の主要なる所にもあれば旁之を抽出して前におき、其の下に主叙を置くこと日本文の慣例なり。修辭家宜しく思を此に致すべし。

(3) **修飾部(主のならぬ)を始に置くもの**

自家の 感情と 技巧とを 土臺と して 歌は 作る 者で ある

三人 その 子は あり

のどやかに 世は なりにたり

頗 愉快に 我は 一日を 暮せり

(4) **主客修獨を終に置くもの**

あらはれて いとど 淺くも 見ゆるかな あやめも わかず なかれけ

る ねの(螢)

春は 來にけり 野に 山に

幾夜 ねざめぬ 須磨の 關守に

梅の 花 折りて かざゝむ 老 かくるやと

對島の 海 あなた こなたを 結びとめて 浪の あや 織れ からの

やまとの(惟助)

戀すて てふ 我が 名は まだき 立ちにけり 人 知れずこそ 思ひそ

めしか

思ひきや 「雪 ふみわけて 君を 見む」とは

ちぎりきな 「末の 松山 浪 こさじ」とは

おのづから 涼しくも あるか 夏衣 日も ゆふぐれの 雨の 名ごり

に(新古)

折られけり 紅 にほふ 梅の 花 けさ 白妙に 雪は ふれゝど(新古)

今更に 雪 ふらめやも 陽炎の もゆる 春べと なりにし ものを(万)

舟 とく(修) 漕げ(叙) 日の よきに(修)

(5) **二種の客部及修飾部と叙述部との關係**

命を 君に 捧ぐ

金を 懐中より 出す

成敗をば　天に　任せむ
膝を　ひどく　打てり
我　彼と　親しく　交れり

此等尋常の例とも聞ゆるが、抑副格のと處置格の客との位置の前後言ひ易からず。案ずるに國語は主客叙と次第すること何の理ぞといふに彼は主叙の係屬密接にて客を下に彈き出し、我は客叙を合せて而る後に主に係屬する差異あるなるべく、其の客は處置格なるが最叙述に密接なる理なれば、勢副格なるは更にその上に彈き出さるべき筈なり。之に因りて前項に正置の場合を說けるが、此處の倒置の時は、處置格なる客は特に始に抽出する必要ありて、その爲に副格の客がと叙語親しく結合せる者なるべし。修叙の關係も同樣にて、尋常ならば客叙の一團に修の添ふ所を、客を抽出して修と叙と密接すれば此の倒置をなすなり。

(6)　**不穩當なる倒置**

決して「之を」以て　憲法を　破壞したなどゝ　いふ　自分は　其の　觀念を　持たぬので　ある(伊藤公)

左樣な　自分は　考を　以て　進止を　伺ったのでは　ない(同)

是が　一つの　大問題と　我々の　醫學社會では　今日　なってをる　所のものである(北里博士)

それ丈　先方に　益する　所が　私は　無かったかも　知れませぬ(同)

此の如く修と被修との間を割りて主又は他の修飾語を挿入すること今の口語には極めて多き事なれば、不穩當にはあれど許容すべきものなるべきも、

此の　時局に　對する　教育に　從事する　人の　心得に　ついては　開戰の　當時に　おいて　文部省より　訓令を　發して　置きましたから　これが　左るしなり(近松薩摩歌)

して　云々(久保田文部大臣)

は前後せざれば如何にも不明瞭なり。

外に　數　なき　類　なき　御家の　こと　なけども　いまだ　雪は　ふりつつ(古)

梅が　枝に　來ゐる　鶯　春かけて　みる　め　なき　我が　身を　浦と　知らねばや　枯れなで　あまの　足たゆく　來る(古)

わが　園に　來て　鳴かぬ　日は　鶯の　あれども　聲を　きかぬ　日は
なし(景樹)

近松のは珍しきが差支なし。春カケテはフリツヽに添る修飾なりと宣長翁言はれたるが如何あらん。ミルメナキは我ガ身と浦と兩方に引きかけたるより此の如きものとなれり。見ル目ナキ我ガ身ヲ海松メナキ浦ト知ラネバヽ」なり。景樹のは鶯ノを始は來テ鳴カヌの主とし、次には聲の修飾として用ゐん爲に「鶯ノアレドモ」といふ續方になりて無理に思はるゝなり。

凡成分の位置は時代によりても修辭によりても變更すること此の如くなれど、無理にならぬ樣に注意せざるべからず。　御製

とこしへに　民　安かれと　祈るなる(以上修飾部にて大神にかゝる)　我が
世を守れ　伊勢の　大神
(挿入)　(叙)　(主)

などは巧なる排列なるべし。

(7)　**修辭上の倒置**　と文法上の倒置とは一致すること多けれど、又おのづから異なること無きにあらず。韓愈の

奔走に　衣食す(衣食於奔走)

は修辭上の倒置なれど、文法上に倒置として「衣食ス奔走ニ」と置き換へらるべきにあらず。又白樂天の

林間　酒を　暖めて　紅葉を　焚く

の如きも、「紅葉ヲ焚イテ酒ヲ暖ム」といふ事を斯く言へるなれど、國文に「紅葉ヲ焚ク酒ヲ暖メテ」と言はれざるのみならず、「酒ヲ暖ムルニ」又は「紅葉ヲ焚イテ」と修飾にいふも共に作者の意を損す。此は修飾と叙述とに言ふべきを叙述の並置に言ひなしたる處に妙味あるを思ふべし。因果の關係ある事にても、それを言語に言ひことわらず、たゞ二つの事の樣に言ひなせる者は、之を前後すること修辭者の隨意にして、文法上より其の位置の正倒を言ふべきにあらず。

星　稀に　月　明なり(月明星稀)
石　出で　水　落つ(水落石出)
月　小に　山　高し(山高月小)
後客　來り　先客　去る(先客去り後客來る　兩事前後不定ナリ)
石上に　綠苔を　拂ひ　詩を　題す(石上題詩拂綠苔)

第三節　成分の省略

或る成分は之を省略しても意義明瞭なることあり。又慣例に因りては之を省略する方むしろ分り易きこともあり。

一　主の省畧

主たる事物の眼前に在るか、前後に在るか、或は特別なる叙述語に因りて、或は大體に於いて明なる時、

（貴君）御機嫌　能く　被爲入候哉

（小生）御蔭に（より）て　無事　罷在候

（天氣）好い　天氣です

（秀吉）今年　朝鮮を　征す（家譜）

（政府、國家）貨幣を　改鑄す（年代記）

公園の　樹木（人之ヲ）折り取るべからず（掲示）

（一般ノ人）土手に　登るべからず

（全員）集れ（部分ノ時ハ「小隊集レ」トヤウニ）

（主上）八幡に　行幸あり

（上皇、女院）大原に　御幸せさせ給ふ

明治　二十三年（天皇）教育に　關する　勅語を　下し賜へり

柏原の　御門の　御時（上）平の　宮　造らせ給へり（續世繼）

今年は（作）豐作なりと（人）いふ

（二月列見ノ式、上卿以下）かんざしの　花を　上卿以下の　冠に　さす（ソノ花ハ）大臣は　藤の　花　納言は　櫻の　花　參議　六位　皆　造花なり（公事根源）

博く　愛する（吾人）之を　仁と　いふ

大臣は（國家之ヲ）親任官と　す

終の二例の如きトストイフはナリタリに通へば、之を附屬辭と定むれば「仁トイフ」「親任官トス」を一叙述語と見るべけれど、言語の形式上そは強ひたるを免れず。トを ふめるは客語にしてイフスは叙述語なりとするに、その主は大臣にあらず、博ク愛スルにもあらず、別に省略の主ありて一叙述句をなせる言方なり。此の如き文を解剖するに句主の省略の事を略して言はざる時は、之を叙述小句といふことを得べ

此の　書は　（書者ノ積ハ）　庇の　積なり

彼は　（筈ハ）　卒業した　筈だ

（譯は（人）親には　孝行を　しなければ　ならぬ　譯だ

（事ノ相ハ）　新潟に　大火が　有った　相だ

此の叙述語の積筈譯相などは名詞なるが、（彼人大火）などの主を叙述し得べき者にあらず、其の主は補塡せる樣の者ならざるべからざれど、前の「好イ天氣デス」の例の如く、言はでも著き事なれば略したるなり。此等をもし一種の接尾語に轉じたる者と見れば、其の上なる成分の附屬物となりて一叙述部をなす事となれど無理なり。同じ相にても「雨が降相なり」といふ時は熟語形容詞にて雨の叙述語たり。又此等の四語と類似せる如きゴトシ樣ナリ通ナリマヽナリなどは皆前體後用の形容詞にて實は相違あるなり。挿入的副詞句の例に擧げたる「世ニ隨フ習ナリなども

（世ノ習ハ）　世に　隨ふ　習なり

（世ノ中ハ）　淵は　瀨と　なる　世の　中なり

と見るべく、

君は　（御考ハ）　學者に　（なる　御考に　候ふや（なるのですか））

〔君ハ「オノレ（學者ニ　ナラン）ト　思フカ」〕

君は　（考ハ）　學者に　なる　（考）なりや

（有ヤウは）「我　一度は　しか　思ひし（コト）なり

など口語ノダと叙述する者も皆叙述句の主を略せるなり

二　叙述の省畧

その　理由は（いかに　（アル）／イカニアル）

我は　行かむ　君は　（行カズヤ）

驚の　宿は　（イヅコ）と　問はゞ　いかゞ　答へむ

主上は　何處に　おはしますぞ　（主上ハ）　黒戸の　御所に　（オハシマス）

上皇は　（イヅクニオハスル）　（上皇ハ）　一本の　御書所に　（オハス）　内侍所は　（イヅクニオハスル）　（内侍所ハ）　溫明殿に　（オハス）　劒璽は　何處に　（オハス）と　左衞門督　次第に　尋ね給ひける（平治）

（オハスル）　（ソレハ）　夜の御殿に　（オハス）　おのれ　今日の　喜を　かくなん　（申ス）

君が　代は　さゞれ石の　苔の　むすまで　（マシマセ）

あなた　どうぞ　（コチラヘ上リタマヘ）

年來　いかで　（見ム）と　思ひし　處をも　見たり

和泉の　國まで　平に　（アレ）と　願ひ立つ

烏だに　孝を　知れり　いはんや　人に　於いて　孝　無くてやは　（アラム）

（ソレハ）　如何にも　仰の　通で　（ゴザイマス）

仁と（イフコト）は　二人の　義なり

此の省略は大抵主の場合と同じきが、疑問文に多く、又修飾の下に多し。

三　主と叙述との省畧

かくては客か修飾のみとなりて、文の主要成分は無き事となれども、其の主も叙述も或る場合には分り切りたることありて、省略しても更に意義を誤らざるなり。

「新潟市は　ほゞ　焼け盡されたり」と（客）（人イフ）

「某侯　昔は　極めて　卑賤なりき」とぞ　（ワレ聞ク）

「彼も　壯時は　一代の　豪奢を　極めたりき」とかや　（世人噂す）

「如何なる　故にや　贓品　我が　袂に　在りしかば」　さてこそ　（汝　盜人）

ナレ）と　警官　我を　疑へり

（ソレハ）　御めでたう　（ゴザル）

やあ　（アナタ）　御機嫌　好う　（入ラッシャルナ）

さ　どうぞ　（アナタ）　此方へ　（入ラッシャイ）

「書生ですら　二十圓は（彼之を）　使ふ」（副詞句）　ましして　君の　位地でさ　（百圓ハ　當前ダ）

（余）　いやだってへばさ（オマヘヨサンカ）

蟻すら　貯蓄を　知る　いはんや　人に　於いてをや　（貯蓄ハ　必要ナリ）

今日ハ今晩ハサ様ナラなどは修飾語なるが、完結せる思想を表す者として「好イ天

氣デス」「御ワカレ致シマセウ」などを補填すれば文と見るべし。ハイイエは獨立語なるが、文と見る必要いなかるべし。シカリは副詞シカと動詞アリと熟せる動詞なれば單に之を用うる時は主語を略せる文と見るべし。然リ我モ歸ラム」などの時は修飾語と見るべし。感動詞及名詞などの一語にて用を弁ずるものは文とすべきが如くにも思はるれど、其等は人の注意を喚び起す丈の用をなすにて、己の思想を完全に言ひ表せるにはあらざるを思ふべし。

四　客語の省畧

第一の矢　うまく（的に）中れり

まあ　一服（茶、煙草など）御上り

中納言も　法師に　なり給ひぬ　惟成の弁も（法師ニ）なり給ひぬ（榮花）

梶原　佐々木に　續いて（馬ヲ　川ニ）うち入れたり

信頼　馬に乗りかね給ふ　所を　侍　二人　つと　寄って（信頼ヲ馬ニ）押し上げたり

月や（昔ノ月ニ）あらぬ　春や　昔の　夢ならぬ

貧乏だに（苦シキモノニ）あるに　重病に　かゝれり

陸奥は　何處は（ヨキ所ニ）あれど　鹽竈の　浦こぐ　舟の　綱手　悲しも（古）

酒　あらば（ワレ　ソレヲ）飲まむ

此の類の省略數ふるに堪へず。普通には省略とも知らで過し居る者多し。されど「ソレハ筆デアルカ」といふ問に對して

はい（ソレハ筆デ）ありますといふが如き省略のなすこと能はざる所注意すべし。英語などは此の筆デといふが同主格（補足）にて其の省略も出來れど、我のは副格の客語にて省略せざるなり。かくてかゝる場合に我は叙述を略して「筆デ」「サ樣デ」と言ひ、又は之を修飾語に「サ樣」とも「サウ」とも言ふなりさて又之を甚しく略するには「デゴザイマス」「デスヨ」などいふ一種の語遣あるは習ふべきにはあらねど、尚客語の面影をデに存する所注意すべし。古語に

（ソレハ）（シカ）あらず　そは　竹なり

とやうにいふことあるこれい今は副詞なる修飾語の省略と見て可なるが、其の根本は客語より轉じたるにもあるべく、漢字非に當るなり。

「何時は　あれど　照る　月の　秋の　さかり　何處は　あれど　行く水の
すみだ川に　夕波の　ふた國　かけたる　月　見んと　て唐　日本の
文人　糸竹にしも　たへたるを　つらねて　浮ぶる　こと　あり（眞淵）

の如きも、アレドの上の省略は客とも修飾とも言はるべし。

五　修飾の省畧

常語にて修飾といふ時は無くて可なる者の様に聞ゆるより、其の省略といふことも有るまじくも思はるれど、文の修飾分は一種の要素なれば、其の省略も亦無きにあらざるなり。

（問）明日　行くや　（答）（アス）行くべし

の如き、アスといふ修飾語を省略したる者と見ざれば、單に「行クベシ」といふは無意義となるを問答の時間短き故に畧したるなり。此の類頗多し。又

（好キ）天氣に　なれり
彼は　（好キ）仕合の　者なり
もう　（櫻の）花も　咲きませう
（今日は）お寒う　ございます

などの場合も言語の上よりは省略と解かざるべからず。但一修飾語が二以上の語に係れる左例の如きは省略とは言ふべからず。

善き　筆と　紙と　あり
我が　心も　體も　よわし
新しく　流行する　靴や　帽子
少し無理なる様にて却って面白き省略は

秋も　（最中ノ）秋　今宵も　（晴レタル）こよひ　月も　（十五夜の）月　處
も　（賀陽院トイフ好キ）處　見る　君も　（前關白ナル）君（後拾光源法師）
西郷も　（エライ）西郷だが　大久保も　えらい
相手も　（好惡ナル）相手なれど　手前も（不注意ナル）手前なり
いづくにか　來ても　隱れむ　隔てつる　心の　隱の　あらばこそ（サモ）
あらめ（後拾）
貧賤ならばこそ（サモ）あれ（ド）貴族の　儉約は　絶對の　美德に　あら
じ

コソアレの事は第十二章のコソの段に參照すべし。或は客を略せると見るべきも

あり。

六　修飾の下なる種々の省略

世の　中は　いづれか　さして　我が(宿)ならん　行きとまるをぞ　宿と
定むる(古)

君の　筆は　我の(筆)より　好し
主　叙句

馬は　太く　逞しき(馬)が　よし
主　修　主　叙

木は　(ワレ)　花の　咲く(木)を　植う
主　叙句

「むかし　我　親の　教に　従ひて　物　かく　わざを　習はましかば」(ワレ
今カク恥ヲ見ジ)(正直)

月　出でたればか　窓　明し
修　主　叙

(ソレ)　月　出でたれば　(然ル)にや　(アラム)　窓　明し
主　名詞句　客　叙　(修止セル)(副詞句)

月が　出たからか　窓が　明い
修

(ソレ)　月が　出たから　(サウ)だか　窓が　明い
主　修　修

風の　散すは　花の　爲(ヨキ事ナリ)
修

落第せるは　勉強せざれば(落第セル)なり
叙　修　叙

大鹽の　擧兵も　(カレ)人民を　思ひて(セルコト)なるべし
修　修

終の三例は簡單にいふ時は省略を含めて叙述部と解きてもあるべし。此の思ヒテ
セザレバを連體語に思ヒタルセザルとする時は次の如くなる。

大鹽の　擧兵も　人民を　思ひたる　(コト、結果)なり
主　修　叙

落第せる(人コト)は　勉強せざる　(人結果)なり
主　修　叙

此の語法を更に變化しては「大鹽の擧兵モ人民ヲ思ヒタリ」「落第セル(人)ハ勉強セズ」
といふことを得左の歌の如きは此等と同樣なる言樣なり。

白雲の　このかたにしも　下り居る(事)は　天つ風こそ　吹きて　來ぬ(レバ

然アルコトナル結果ナ）らし（躬恒）

此の種の省略を進むる時は修飾語が其の形體を變じて直に主客叙の形體をとることあり。簡單に解くには省略を言はでもあるべし。

起床（ノ時間）ハ　五時　正午が　食事（ノ時間）なり
（主　主　叙　主　修　叙）

君（ノ服裝）は　洋服　我（ノ服裝）は　和服なり

我が　國體は　諸外國（ノ國體）と　異なり
（修　客）

大將軍　義經は　熊の　皮の　頰貫を　はき　自余は　牛の　皮（ノツラヌキ）を　はく（盛衰記）
（客　修　客）

陶器は　有田（ノ陶器）が　最　堅し
（主　叙句）

高山　正之　畫は　沈南瀕（ノ畫）を　學べり
（主　叙句　叙）

此等を西洋流に一々ノソレといはんは無用の煩雜なり。さて始の二例の如きは

起床は　（時間は）　五時
（主　叙句　主　叙）

の如くも解せらるれど、前說の方妥當なるべし。こゝに又一問題あり。「我ハ讀本ハ一ノ卷ヲ讀ム」の讀本ハの如き領格とも或は副詞とも言はるべけれど、尙主格にて「讀本ハ一ノ卷ノ讀本ナリ」といふ文を客に用ゐたる一種の語法と見る方眞を穿てるなるべし。（第十二章ハの段參照）

此の　書は　紙は　舶來（ノ紙ナル）を　用ゐたり
（主　客　修　叙）

（前の「正之」の例の如く「紙は舶來を用ゐたり」を叙述句とも見るべし）

これは　珊瑚も　土佐產（ノ珊瑚）なり
（主　叙句　主　修　叙）

我が　住所は　東京も　四谷の　奧（ノ東京）なり

此の修飾語と省略語とを熟語にする時は次の如く尋常の形となるなり。

彼は　金も　純金なり　（金も　純なる　金なり）
（主　叙句　主　叙　修　叙）

これは　珊瑚も　土佐珊瑚なり

以上六項に分ちて略省略を說きたるが、其の應用頗廣く文を解するに極めて肝要なり。諸種の例に之を試みて會得すべし。

鎌倉の　海に　かつをと　いふ　魚は　かの　境には　さうなき　物にて

この　頃　もてなす　物なり（徒）

昔　唐土に　孔子　林の　中に　おはしけるに（宇拾）

伊藤侯は　海軍なら　方々で　陸軍なら　奴等でせう（兒玉源太郎）

今こそ　あれ　我も　昔は　男山　さかゆく　時も　あり來し　者を（古）

月は　あれど　花は　あれども　樣　かへぬ　富士こそ　國の　ながめな

りけれ

結構な　御菓子を　有り難う

今度の　一件は　どうです　英吉利も　英吉利だが　獨逸も　獨逸ですね

天地の　理は　周流活動する　者で　ある　あるから　區々の　私見で

死縛しては　ならぬ

貴意　如何に　此の　使に　御返事を

拾遺集　花山院　御自撰と　いへど　此（新古今）の　序は　公任卿の撰と

決してなるべし（八代集抄）

第四節　係結

一　成分の係屬

四成分の中にて主と客とは敘述に係り、修飾は被修飾に係ること今更に言ふに及ばず。されど成分には並置あり倒置あり省略あり挿入など有りて、複雜なる文にては此の係屬必しも一見明瞭ならず。美シク咲ケル花ヲ飾レリ」の美シクは「サケル」に係るや「飾レリ」に係れりや不明なること多き由は「副詞」の段に言へる如く、「戀シキ故山の風物」の戀シキは故山に係るや風物に係るやの事は「成分の並置」の段に言へる如し。其の他

此の　風は　「龍の　吹かする（風）」なり（竹取）

かくいふは播磨守の子の　藏人より冠　得たる」なりけり（若紫）

直衣　着たる　人の　おはする」なめりと　聞ゆれば若紫）

などの「龍ノ子ノ宮ノ」をナリナリケリナメリにて受けて結べりと大槻氏は見られたれど、恐らくは然らじ。此の類の事は「省略」及「挿入」の段に說きたるを參照すべし。又

そんな　私は　積で　なかった

のソンナは私に係らざる由は「倒置」の段に言へる如く、文法を考ふる者及古文を解釋する者は深く此の成分の係屬を思はざるべからず。

二　係結の意義

(1) **係結**　直說終止法の叙述語に係る主語客語修飾語に疑詞辭又はゾナンある時は第四變化、コソある時は第五變化にて之を結ぶ。之を係結といふ。(此等の係なき叙述語は第三變化にて終止するは尋常の係屬なれば特に說かず)

(2) **結ばざる叙述語**　疑詞辭に係ると雖も、之を受くる叙述語が終止せずして小句・段に言へり。其等の外に係となる者にても、之を結ぶこと能はざるなり。句をなす者は固より之を結ぶこと能はざるなり。

年頃　よく　具しつる　人々なん　別れがたく　思ひて云々(土佐)

主　副詞句　叙

形なん　いと　よかりし　人なり

主　形容句　叙

安和三年とぞ　いふめるに　位にて　三年にこそは　ならせ給ひぬれば

客　副小句　叙　客　副小句　叙

(月宴)

そは　誰が　いへる　言ぞ

主　形句　叙

後宇多の　御門こそ　ゆゝしき　稽古の　君に　ましくしに　(後醍醐)

主　副　句　叙

その　御跡をば　よく　繼ぎ申させ給へり(正統記)

されば　賞せられたる　次第と　知らる

修　形小句　叙

言掛なるも結ぶこと能はず引用挿入には適宜に原文を切斷すれば係結に與らず。

小夜千鳥　聲こそ　近く　なるみ潟　傾く　月に　潮や　滿つらむ(新古)

主　形句　叙

いつか　我が　身の　をはり　なる　熱田の　八劍　ふし拜み(太平記)

修　叙

梅の　花　誰が　袖　ふれし　匂ぞと　春や　昔の　月に　とはゞや(新古)
強ひて　なほ　袖　ぬらせとや　藤の花　春は　幾日の　雨に　さくらむ
(定家)

(3) **結べる前提法**　下にドモの意あり。直説法にあらざれども尙結といふべし。

色こそ(主)　見えね(叙)(副句)　香やは　かくるゝ
彼は　評判こそ(主)　高けれ(叙)(副句)　實力は　なし

(4) **二つの結**　一つの主客修の係る叙述語の並置せらるゝ場合に各叙述語にて之を結ぶことあり。

「鏡なす　吾が　思ふ(客)　妻　あり」と　言はゞ(叙)(副小句)　こそ　家にも　ゆかめ(叙)　國を
も　しぬばめ(叙)(輕太子)

「日の本の　やまとの　國は　言靈の　さきはふ　國」とぞ(客)　古言に　流し
來れる(叙)　神言に　傳へ來れる(叙)(續後紀)
人こそは(主)　狂とも　いはめ(叙)　愚とも　そしらめ(叙)
汝は　何をか(客)　いへる(叙)　思へる(叙)

(5) **二つの係**　を一つの叙述語にて結ぶこともあり。

何處に(客)　誰と(客)　何しに(修)　行ける(叙)
止りてや(修)　行きてや(修)　あらむ(叙)
花をなん(客)　その　花をなん(客)　我は　忘れぬ(叙)
此の　山の　盡きばのみこそ(修)　此の　川の　絶えばのみこそ(修)　百敷の　大
宮處　やむ　時　あらめ(叙)(赤人)

高砂の（客）峰の（客）松とや（修）世の（客）中を（客）守る（客）人とや（修）我は（叙）なりなむ（貫之）

かく（修）してや（修）なほや（修）退らむ（修）近からぬ（修）道の（客）間を（客）なづみまゐ來て（萬）

ゾ・ナン・ヤ・カ・コソ互に重りて叙述語に係ることなしさるは「今日コソ花見ニゾ行カメ」など強ひて言はゞ言はるべけれど、コソとゾと相剋殺して兩方の意義を損するより修辭上之を取らざるなり。「思フ心ヲヤ今ヨリコソハ試ミルベカリケレ」（蜻蛉）のヤも、夏ハツル賀茂ノ河原ノミソギコソ神ヤ受クラム秋風ノ聲」（千五百番）のヤも調はず。同じ辭なるも用方によりては調子を損ず。「世ヲ捨テヽ入リニシ道の言ノ葉ゾアハレモ深キ色ゾ見エケル」（續拾）又は「立チネトヤ言ヒヤヤラマシ白雲ノトフコトモナク宿ニ居ルラム」（貫之集）などの類倣ふべからず。「ヨロヅ事ニテコソ候フラメ」（太平記）などは別々なり。

三　係結の變

(1)　疑詞及ヤの係を第三變化

即尋常の終止法にて結べる者あり。

涙川　流す　寢覺も　あるものを　拂ふばかりの　露や　何なり（後）

嬉しきを　忘るゝ　人も　あるものを　つらきを　戀ふる　我や　何なり（後拾）

起きて　ゆく　空も　知られぬ　明ぐれに　いづくの（修）露の（主）かゝる（叙）袖なり（若菜下）

君　戀ふる　涙に　ぬるゝ　我が　袖と　秋の　紅葉と　いづれ（主）まされり（叙）

吾が　髮の　雪と　磯邊の　白波と　いづれ（主）まされり（叙）冲つ島守（土佐）

淡路島　通ふ　千鳥の　鳴く　聲に　幾夜（修）ねざめぬ（叙）須磨の　關守（金）

年　經たる　宇治の　橋守　言問はん　幾世（客）に　なりぬ（叙）水の　みなかみ（新）

住吉の　松の　千歳と　君が　いづれ（主）久しと（叙）神に　とはゞや（拾玉）

此等は皆疑問文なるが、連體形にて結ばぬは此の頃よりの一種の語法にて柔なる言樣なり。「ヤ何ナリ」は「何ナリヤ」と同じく「イヅレ勝レリ」は下にヤを添へたると同じ。源氏物語の歌なるは「イヅクノ露ノカヽル」といふ疑問修飾句より「袖ナリ」といふ叙述語に係るにて、口語誰ノ本ダ」といふに同じ。此等變例にはあれど、國語として決して不正なる者にあらず。かく言ふが此等の場合に最適當せるなり。第十二章ヤカの段と參照すべし。

(2) **コソの結**　奈良時代まではクシク活の第五變化の形完成せざれば、コソを第四變化にて結べり。

衣こそ　二重も　よき　小夜(サユ)床を　並べむ　君は　恐きろかも(仁德紀)

おのが　妻こそ　とこめづらしき(萬)

玉くしろ　まきぬる　妹も　あらばこそ　夜の　長けきも　うれしかるべき(萬)

後世のにも「年フレバ忘ヤセムト思フコソ逢ヒ見ヌヨリモ我ハワビシキ」(信明集)など此の類なるも少しはあり。されど「萬代ヲヨバフ山邊ノヰノココソ君ガ仕フル齡ナルベシ」(蜻蛉日記)や「諸共ニコソ笑ヒテキ」(仝上)や「紅葉ハ惜シキ錦ト見シカドモ時雨ト共ニフリテコソ來シ」(後)や「來ムト云ヒテ來ザリシ夜モアリシカバ待タヌシモコソ待ツニマサレル」(六帖)「コノ殿バカリコソ見奉り侍ランズラント思ヒケレバ……住ノエ殿ト申ス所コソ京ノ尼上トテオハスルトイヒケレバ」(住吉物語)などは正しき者といふべからず。

(3) **係屬の變**

紫苑と　いふ　草こそ(主)　「それを　見る　人　心に　覺ゆる　ことは　忘れざなれ」(宇拾)

人の　心ぞ(主)　「風も　吹きあへぬ」(古)

象こそ　「體　大なれ」

などは文主の係を叙述句にて結べるにて、係屬上難なきが、

明けぬれば　つれなく　なりぬ　「女郎花　人　知れずこそ(修)　折らむ(叙)」と　思ふに(躬恒)

あはれ　てふ　こと　に　しるしは　なけれども　言はでは　えこそ(修)　あ(修)

叙
らぬ　ものなれ(貫之)

「是も　亦　これの　島根の　人にこそ　有りき」と　云ふなれ(續後紀)
客　叙

あまり　よろづ　勝れ給へらむ　女の　御あたりには　誠の　御せうとな
修　叙

らざらん　男は　いみじうとも　睦しうこそ　おふし立て給ふまじき　わ
修　叙

ざなりけれ(狹衣)

この　帝……父帝の　位に　卽かせ給ひて　五日と　いふ　日に　生れ
主　叙

給へりけんこそ　いかに　折さへ　花やかに　めでたかりけんと　覺え侍
客ト　モ　叙

れ(大鏡)

「まだ　世にこそ　おはす」なれ(仝)
叙

「明けてこそ　見む」と　思ひし　箱崎の　波間に　かすむ　松の　村立(景樹)
修　客　叙　叙

などは係屬を誤れり。されど此等のコツを正しく結びて試むるに、語氣何となく相
應せず。かゝるは叙述句の場合と等しく、成分の係屬をば忘れて唯語氣にのみ釣ら
れて「折ラムト思フニ」「アラヌモノナレ」などを一叙述部と見て、それにて結び或は流
せる者なり。「オハスナレ」などはオハスルの下に體言の省略あるを早くより忘れて
一語と心得たる者の樣なり。此等好んで學ぶべきにあらざれども破格とは言ふべ
からず。

喜憂は　見る　人の　心による　物にこそ　あれ
心にこそ　よれ
心にこそ

など三文共に用ゐらるゝなり。此の點に於いては係結と成分の係屬と一致せざれ
ども、其の他は全然一致すべき者なり。さて茲に一言辨ぜざるべからざるは此の結
と歌文の終との差別なり。歌文の終には、叙述語のみならず、主語も客語も修飾語も
獨立語もありて、叙述語以外なるは結に關せざるを、古人は係結の一部として說け
るもあるは丁寧過ぎて體を失せり。又叙述語なるも用言用辭以外は結に關らぬを
體言にて結ぶとか何辭にて結ぶとか沙汰するも無用なり。而して此の係結は主と
して平叙・疑問の二文に存する者にて、命令文感歎文に於いては趣を異にすること
多し。そは後章に就いて見るべし。倒置なき文の終にあるべき助辭のことは各の段

に言へり。體言にて終れる者は後章にいふ提示文なり。

降る　雲の　みの代衣　うち着つゝ　春　來にけりと　驚かれぬる(後)

あひに　あひて　物　思ふ　頃の　我が　袖に　宿る　月さへ　ぬるゝ顏なる(古)

梅の　花　香をのみ　袖に　止めおきて　我が　思ふ　人の　おとづれもせぬ(新古)

時鳥　峰の　雲にや　交りにし　ありとは　聞けど　見る　由の　なき(古)

の類皆連體法にて、結べるにあらず。ノを係辭とするは委しからず。但疑詞を係とせぬ人もあるは如何あらむ。長濱ノ眞砂ノ數モ何ナラズなどのナニは固より不定詞なれば係にあらざれど疑問文を成すものは尚係にて、連體形にて之を結ぶなり。其等をすべてカの省略とは言ひ難かるべし。

第十六章　文の種類

文法上に言ふ單位の文は、其の組織上より、性質上より、又は事物の待遇上より、語氣上より種々に分類すべし。

第一節　組織上の種類

最簡單なる文は一主語と一敘述語とより成る。而して之に客語又は修飾語を加へたるあり、其等の語の二個以上並置せられたるあり、其の成分の小句又は句なるあり。今主語と敘述語との關係によりて單文複文重文の三に分つ。

一　單文

一個或は並置せる主語の一個或は並置せる敘述語敘述句に係る者を單文といふ。

花　さく

夜　漸く　長し

家康　かつて　今川氏に　質たりき

よく　勉強する　人は　將來　必　何事かを　世に　殘すべし

我　昨年　支那に　遊びて　風俗　人情を　視察し　彼の　大官　紳商

或は　青年に　交りたり

梅も　櫻も　散れり

竹の　幹は　圓く　長し

彼　よく　勉め　よく　遊ぶ

此の中の並置成分なるは主叙の關係單一ならざれば單文にあらず、聯構文なりと說く人もあり。成る程事物は單一ならざれど、主叙の關係は然らず。「梅チレリ」「櫻チレリ」といふ二文を併せたる者と、「梅モ櫻モ散レリ」といふ一文とは意義同じからず。「竹ハ圓ク長シ」も單に圓しといひては球の如くも誤られ、長シといひては草木の如くも誤らるべく、「圓ク長シ」にて始めて竹幹に對する其の人の思想を表すべきなれば「竹ハ圓シ」「竹ハ長シ」の二文を併せたる者とは言ふべからず。

天と　地と　分る
太郎　次郎は　兄弟なり

に於いて天ト地ト太郎次郎ハ並置主なればこそ分ルとも兄弟ナリとも言はるべけれ。「天ト分ル」「次郎ハ兄弟ナリ」にては何の意義をも成さぬを見るべし。是に由りて並置成分なるは二個以上の文を聯結搆成したる者にあらず、本來思想の形式がかく成り出でたる者なるを知るべし。（聯搆說に從ふ時は修飾語客語などの並置の場合も同樣に言はではならぬ理となるべし）

象は　鼻　大なり
我　財産　無し

の如きは主語と見るべき者二個あれば單文にはあるまじきかとも思はるれど、此の際の叙述句は一個の主語に係屬せる者なれば、主叙の關係單一なり。從って

日本は　面積　狹く　人口　多し
公　學　博く　德　高く　才　長し

の如く叙述句を並置せる者もなほ單文とすべし。是に於いて更に單文は形容句副詞句中止句を含まざるものなりといふを得べし。

二　複文

文の本系に對して、他の主叙の關係ある句の附屬せる者を複文といふ。

我　先日　牧溪の　かける　龍虎を　見たり
君が　いふ　美は　我と　異なり
孔子の　說ける　天と　耶蘇の　說ける　天とは　同じからず
月　明なれば　星　稀なり
水　あまり　清き　故に　大なる　魚　すまず
雨は　ふる　とも　風だに　吹かずば　我は　行くべし。

此等は形容句副詞句を含める文にて主叙の關係の單一ならざるより複文といふ

なり。獨立句あるも然り。

月の　明なる　星の　稀なる　兩者　因果の　關係　あり

副詞句の前提的なるは下の全文に係りて、他の形容句又は形容句ある副詞とは趣を異にすれど、今は大體に之を複文とせり。

三　重文

文の本系に附屬せずして主叙の關係ある句を含む者をいふ。即中止句ある文を重文といふなり。

花　咲き　鳥　歌ふ

春　すぎて　夏　來たり

平氏は　壇の浦に　亡び　北條氏は　鎌倉に　終れり

月　明に　星　稀に　鳥鵲　南に　飛ぶ

信長は　身を　全くせず　秀吉は　一代の　榮を　極め　家康は　十五代の　基を　開けり

四　混交文

以上諸種の組織の混交せるをいふ。

花　さき　鳥　なく　春の　景こそ　をかしけれ(重文組織ある複文)

體溫　下らず　食慾　進まずば　彼の　病人は　危險なり(同上)

父　慈に　子　孝なれば　家　治る(同)

雨　降れば　我　書を　讀み　天　晴るれば　彼　耕す(複文組織ある重文)

君が　敎へし　子は　賢く　我が　生めるは　愚なり(同上)

先生の　德　山　高く　水　長し(重文組織ある單文)

薩の　健兒　衣は　肝に　至り　袖　腕に　至る(同上)

我　雨　ふれば　讀み　天　晴るれば　耕す(複文的重文を單文に組織せる文)

東風　吹かば　にほひおこせよ　梅の　花　主なし　と　て　春　な忘れそ(同上)

春(節)は　花　さき　鳥　うたひ　秋は　實　熟し　葉　枯る(重文組織ある者を重ねたる重文)

今は　富士の　山も　煙　立たず　なり　長柄の　橋も　造るなりと　聞

く　人は　歌にのみぞ　心を　なぐさめける（複文を含む重文を客とせる單文）

およそ此の組織上の名は人爲にして極めて妥當なる名にはあらず。されば某句ある文又は某句と某句とを某樣に併せたる文など稱しても事足るなり。惡しく拘泥すべからず。

第二節　性質上の種類

文の性質は平叙、疑問、命令、感嘆の四種に分る。

一　平叙文

事物情意の有の儘を叙述せる文にて、肯定、否定、斷定、想像、希望、完了、過去、現在、未來等に小別することを得。

人は　萬物の　靈なり
君子は　人を　責めず
子　泣くらむ
水の　清き　心に　なりたし
鳥も　啼きぬ

秀吉も　かつては　走僕たりき
明日さへ（加賀）降らば　若菜　つみてむ

二　疑問文

或は疑ひ或は問ひ或は疑ひ問ふ者にて、疑詞辭あるを常とし、對話體なるには之を缺けるもあり。其の叙述語の用言は連體法なるを常とし、稀には終止法なるもあり。

春や　とき
彼は　誰ぞ
君は　何處にか　行きたる
明日　御出被下間敷哉
そは　信なりや
その　喜　如何ならむ
須磨の　關　有明の　空に　鳴く　千鳥　傾く　月は（ィヤ）　汝も　悲しき（ィヤ）
帶刀知らぬ　けしきをだに　見給はずや　ある　腹立ち　恨み給ふ」と　腹立たせも　あへず　たはむれ　したり（落窪）

はや　ね給へる(蜻蛉)
あれは　出來たの(か)
係結は　もう　濟んだ(か)
我が　髪と　雪と　磯べの　白浪と　いづれ　まされり　沖つ島守(土佐)
戀しきに　思ひこめつゝ　ある　ものを　人に　知らるゝ　涙　何なり(後)
お前は　何を　するんだ(ネ、ヨ)

疑詞辭ありても疑問文をなさぬ者あり。

長濱の　眞砂の　數も　何ならず　つきせず　見ゆる　君が　千代かな(金)
ぬれつゝぞ　強ひて　折りつる　年の　内に　春は　幾日も　あらじと
思へば(古)
誰ぞ　來よ
物　思ふと　過ぐる　月日も　知らぬ　まに　今年も　今日に　はてぬ」と
か　聞く(後)
何時か　一度は　行き見む
それは　何處かに　有った　筈だ
昔　何とかや　いへる　大臣　ありけり

三　命令文

は他に事を命令するものにて必命令述語を有す。

雁　雁　わたれ
東風　ふかば　匂ひおこせよ　梅の　花
汝　君子儒たれ　小人儒たること　なかれ
軒端の　梅よ　春を　忘るな
女は　やさしかれ　男は　をゝしかれ
知って　知らざれ
君よ　しか　な思ひ屈せそ

四　感歎文

は感嘆的に言ひ表せる文にて、感嘆の詞辭あるを常とす。

あはれ　今年の　秋も　往ぬめり
花の　色は　移りにけりな
あな　戀し　なき　その　人

南無三　しまった

鶯　なくも　網手　かなしも

彼こそ　あっぱれ　大将や

坊ちやんは　御利口ですね

それは、行けませんよ

津の　國の　難波の　春は　夢なれや

梅　盛なる　我が　宿を　とめ來かし

ちと　入らっしやいましな

わたし　嫌だは(はい)

感嘆文は平叙疑問命令の三文の感嘆なるに外ならざれば、もし「各三文の感嘆」といふ名目を立てなば漠然と感嘆文といふことは不用となるべし。かくて歌などの大方感嘆なるは固より、對話語も切口上ならざるは大抵感嘆文なるを見るべし。さ樣に感嘆文の多きは如何あるべきなれば、口語のネヨなどは輕き辭として平叙文に繰り入れてもあるべけれど、又考ふればこれが國語の一特徴にもあるべきなり。但いはゆる感嘆は強き驚嘆のみにはあらで婉曲なる咏嘆もあることを記憶すべし。

されども

我はもよ　安見兒　得たり

これも　皆　さぞな　昔の　契ぞ(と思ふものから淺ましきかな)(千、和泉式部)

誰かは　春を　恨み果てたる

わりなしや(獨立語)　人こそ　人と　言はざらめ　身づから　身をや　思ひすつべき(紫式部)

の如く、一語に感嘆辭の附ける者あればとて、其の全文に係らざるは感嘆文とは言ふべからず。又「ヤヨヤ待テ山時鳥」ソヽ、來ニタナリト集リテ(今昔)「ヤヲレ一同愷ニ開ケ」「世ノ中ヨ道コソナケレ」の如く感動詞あるも全文に係らぬは尚感嘆文といはず。(コソゾシ等を用ゐたる、又は「有リハシナイ」「逐電シタル其ノ時ハ云々」などの強意文も感嘆とは異なり。)

感歎文の形式

一問題を生ず。そは終止法命令法なるに附けるは論なけれど、

鶯の　今朝　なく　聲の　めづらしきかな

の如く連體法に附けるは、感辭を除けば全文は實は形容句(名詞句)にて、それに感辭

を添へたりとて文なりとは言ふべからざるに似たり抑此等は完結せる思想を表せりやはた感嘆文は性質上叙述的ならで提示的なるべきものかまづ數例を解き見むに、

波に　さまよふ　捨小舟（名詞小句）

（人）子を　持ちて　知る　親の　恩（名詞句）

（ワレ）まだ（ソレヲ）ふみも　見ず　天の（獨立）橋立（平叙文）

（事ノ由ハ）某氏（主）昨日　上京せる（名詞句）由（叙）

（物ハ）親には（名詞小句）孝行する（叙）物だ

（スベキ事ハ）（人）若い　時に（名詞句）勉強する　事ですね

一同　随分（副詞句）奮發候ふ　様（ワレ望ム）

（境遇、所ハ）我は　今（名詞句）外出せむと　する（所なり

（事ハ）私は　知らない（名詞句）ことよ

まあ　あれの　怒った（獨立句）こと（アレハ何トシタ事ダラウ）

（世ハ）三年の　あなたにも　なりにける　世かな

（定ヤハ）何と　いふ　まあ　譯の　分らない　定やでせうねい

（我ノ此ノ頃ハ）風を　いたみ　岩　うつ　浪の　おのれのみ　碎けて　物を　思ふ　頃かな

あらざらん　この　世の　外の（主）思出に　今一度の　逢ふこともがな（アレ）（叙）

カシ、等（又ハ「逢フコトモアリシガナ」）

（君ニ似タルモノハ）めぐり逢ひて「見しや　それ」とも　分かぬ　間に　雲がくれにし　夜半の　月かな

（クヤシキコトハ）やすらはで　ねなましものを　さよ　ふけて（我）傾くまでの　月を　見し（コト）かな

秋風に　たなびく　雲の　絶間より　もれいづる　月の　影の（主）さやけさ（名句）（形句）（叙）

（ソレ譬ヘム方コソナケレ）

かく　すれば　かく　なる　ものと　知りながら　やむに　やまれぬ　大和だましひ（我之アルヲ如何ニセム）

此等は省略として補塡すれば普通の形式となり得れど、尚獨立句のみなるを補ひ

て文とせんは「火事々々」と叫ぶを文とせむが如く、やゝ穩當ならざるべきか。されど我が歌文は短歌俳句のみならず、長き者も多く此の如き形式にて成れるものなるを、文にあらすとせんは、それら完結せる思想を表せる者にあらずといふ事になりて、是亦中正の解にあらじ。省略とせざらんには提示文などいふ名を立てゝ叙述以外にかゝる形式の文ありと定むべきなり。而してカナを添へたるなどは簡便にはあるべし。今はしばらく斷言を避けて三說を存し、學者の研究を俟つ。

五　意義上の相關

前述四文の性質は各差異あれども、之を實地に用うる意義よりすれば互に相關係することあり。

(1) **想像の平叙文及ロ語ネナを添へたる感嘆文**　は言ひ懸けて念を押し、對手の同意を求むる點に於いて疑問文に類似す。

君は　九州人ならむ　言語に　その　特徴　あり
諸君は　もう　了解したんですね　それでは　前へ　進めます
あの　方は　君の　骨肉なるべし　容貌　似たり

あなた　一杯　御やりなさいましたね
君は　あす　歸るね

「君ハ明日歸ルカネ」の如き疑問文なるとは音調にも差あり、又カを添へざる疑問文にはネと感嘆せざるなり。

(2) **疑問文は**　反語となり、誘引希望となり、推問の意減じて了解驚嘆などの意ともなる。（疑辭は感嘆に通ふは本來の意義なり）

いかで　さる　事　あらむ（アラジ）
駿馬の　骨を　買はずやは　ある（買ハズハアラジ）
古の　野中の　清水　流れ來し　末のみ　淺く　汲みて　あるべしや（豐穎）
（アルベカラズ）
火　なき　所　豈　烟　あらむや（アルマジ）
（人）古を　仰ぎて　今を　戀ひざらめかも（戀ヒズハアラジ）
ちと　御出被下間敷哉（御出ヲノゾム）
御同行　如何に　候哉（御同行ヲス、ム）
早く　よさんか（ヨセ）

櫻花　春　加れる　年だにも　人の　心に　飽かれやは　せぬ(古)(アカレヨ)
時鳥　聲も　聞えず　山彦は　おのが　鳴く　ねを　こたへやは　せぬ(古)
(答ダニセヨ)
思ひやる　心も　空に　白雲の　出で立つ　方を　知らせやは　せぬ(新古)
(シラセヨ)
あゝ　印度は　遂に　自立せざるか(徐儀ナノコトヤ)
某氏　果して　死せるか(シニケルヨナ)(是　國家の　不幸なり)
あの　人が　いよ〳〵　始めましたか(マア〳〵)(それは　結構です　屹度　成功しませう)
然様ですか(オヤサウデスネ)(それはどうも……)

(3) **命令文は**　勸誘希望許可放擲などの意ともなる。

心配し給ふな　試み給へ(給フガヨシ)
徒然なる　今日　人も　來よかし(來レバヨイ)
君　願はくは　吾をして　三年間　某事を　研究せしめよ(セシメムコトヲ望ム)
汝　確固たる　成算　あらば　行へ(行ヒテモヨシ)
そは　とも　あれ　かくも　あれ(アリテモ構ハズ)
思ひ入る　道に　此の　身は　捨小舟　風　吹かば　吹け　浪　立たば
立て(吹キテモ立チテモマヽヨ)
牛の　子に　ふまるな　庭の　蝸牛　角　あれば　とて　身を　なたのみそ(夫木)(蹈マレズタノマヌ樣ニ)

(4) **感嘆文は希望を表するあり。**

世の　中は　常にもがもな(常ニモアラセタシ)
出でゝ　行かん　人を　止めむ　由　なきに　隣の　方に　鼻も　ひぬかな(古)(ヒレバヨイ)
我が　門の　一むら薄　刈り倒はん　君が　手馴の　駒も　來ぬかな(後)(コムヲ願フ)
かくて希望を表す文は平叙も疑問も命令も感嘆もありて言方の最豐富にして複雑なるを知るべし。

第三節　待遇上の種類

事物を待遇するに尊卑を問はず平等にするあり、崇敬するあり、卑罵するあり、此等は各語に存するものにて、前篇各條に說きたるが、之を湊合する時は文の種類となるなり。

一　平說文

事物を平等に對遇して其の有やうをのみ表し、上下なき語より成る者なり。

大日本帝國は、萬世一系の　天皇　之を　統治す

西鄕　隆盛は　維新の　功臣なり

德川氏　國家に　罪ありや

汝　活眼を　開きて　歷史を　見よ

あゝ　江戶時代の　封建制度は　眞に　世界の　偉觀なるかな

大は美稱なれども自稱にて尙平說なり。天皇汝は敬語なれど、他に語なければ、こゝにては平說なり。隆盛と名をいふは貶する場合もあれど、今は然らず。

二　崇敬文

事物を崇敬するより、其の主體所有動作狀態を尊び、或は自己に關する者を卑下し、或は聽者を敬ふ者なり。崇敬に尊他・自卑・關係・對話の四種あり、名詞代名詞動詞形容詞（副詞接續詞接頭語接尾語）の如何によりて之を表すこと前篇第七章に言へり。今之を湊合せる二三の例を示す。

皇御國は　すめらみこと　しろしめす　（尊）

西鄕は　功臣に　候ふ　（對）

德川氏　國家に　對し奉り　罪　あらせられ候ふや　（關）（尊）（對）

貴君　御目を　御開きなされて　御覽　候へ　（尊）（尊）（尊）（對）

伜も　參上仕るべく候　（卑）（關）（對）

あなた樣にも　御入來被下度　御願申上候　（尊）（尊）（關）（對）

あはや　法皇の　流されさせ　おはしますぞや　（尊）（尊）

三　卑罵文

殊更に事物を侮蔑して惡しく待遇する者なり。名詞代名詞動詞によりて之を表せども、極めて小數なり。

權助の　野郎め　何を　ぬかす

貴樣も　けつかるか
ざま　見あがれ　この　餓鬼
人の　物を　盜みくさった　こん　畜生　やい

第四節　語氣上の種類

語氣といふは其の意義頗廣し。

尋常	強意
咲花く	花こそ咲け
流たえず	流たえせず
我が忠告せる主意	我が忠告せる其の主意云々
音信なし	音信のなき
まづい物も旨く食はる	まづい物を旨く食はす
口は禍の門なり	口は是禍の門
君は此の事を知らん	知らずや君は此の事を

かゝる強意の文も語氣上より尋常平坦の文と區別するを得べけれども、其等は各語の用法として已に說きたれば、こゝに言はず。今は聽手の間接なると直接なると、及言表の自己の上なると他の上なる、即話記者の位置によりて生ずる語氣の相違を述べむ。

一　對話體と記錄體

自己の言說を聽く者、直接に眼前に在るか、然らざるも一定し居る時は、其の聽者に對して自然に一種の語氣をなす。之を對話文といふ。人の言說は必聽者あるを期すれども、之をそれと定めずして、或る事物に就きて思想を言ひ表せる者は、亦之に相當する語氣あり、之を記錄文といふ。言語は自己の思想を他に對して言ひ表すより生じたる者なれば、根原に於いては兩體の區別なかるべきも、今は頗その相異を認むるに至れるなり。例へば物語の地、脚本類のト書、歷史、律令、諸記錄、科學書、獨言等は大抵記錄體にして、物語脚本類の詞、詔勅、上奏、祝詞、宣命、手紙より日常の談話は皆對話體なり。兩體の語氣の異なる所、頗微妙にして甚言ひ易からざれども、今其の中に顯著なる者に就きて說明すべし。

(1)　**兩體と崇敬文**　記錄體の文は事を記すが主眼なれば、崇敬すべき人の上にても敬語を用ゐず、

日本武尊　東夷を　征す

など樣に言ふこと多し而も此の尊は已に敬語なれど今は固有名詞中に包含せられたれば、敬語を用ゐざらむとしても之を省くこと能はず、省きては特殊の省略の樣に聞ゆ。是は天皇皇后某親王官位の名或は崩薨卒幸行啓勅奏などの敬不敬共に之を變ふること能はざるが如く、「天皇大和ニ幸ス」も敬文と言ふを要せざる例なり。されど、記錄文は必しも崇敬を用ゐざるにはあらず、征シ給フ或は幸セサセラルの如く、或は

三條公 辭表を 呈出せらる

の如き、國民一般に敬する上の事をば崇敬文にすること、今の新聞紙雜誌歷史等に見て明なり。但特に世界一般に通用する記錄文ならば、世界一般に讀ましむる敬語に限り用うべき理なり。對話體の文は之を聽く人定り居るに因りて、記錄體に用うる敬語の外に、對者と自己とに相當する敬語を加へざるべからず。

あなたが なさる
御出被下候へ
私が 致す
參上仕り候
御覽被成候哉
拜見致し候

の如きは、西洋文の人稱數などの一致と同じく動すべからざる者なり。かくて對話文には更に侍リ候フマス等の對話敬語ありて、非情物にも貴者にも賤者にも之を用うるは唯對聽者を敬して言詞を丁寧にするなり。此の敬語は平安時代より起りたるが今世の奏啓文など之を用ゐざるは、それ以上の古文の體をとれるか、漢文直譯流をとれるか、今文としては體を得たる者にあらず。學校の祝祭日又は葬式などに

謹んで ○○○を 祝し奉る
○○は 某君の 長逝を 悼み 恭しく 弔辭を 呈す

と述べ又は讀み上ぐるも誰に對するにや、語氣不當甚し。さるは凡支那文は記錄體に西洋文は對話體に偏して共に兩體の語氣を區別せざるより、我が國文もさるこゝと思ひて之に注意せざるなるべし。之を獨言もしくは古言の體なりと言はむは一理あれど、今の言としては尙ふさはしからず。さて又之と反對に記錄體なるべきに對話體を用ゐたるもあり。古今和歌集は序は記錄體なるが、歌の端書には侍リマカルなどの對話敬語あるは天覽に供せむ心掛より自然に混じたる者なるべく、それより以下の歌集或は其の外にも同樣の敬語あるは、讀者を尊び作者みづから謙りたる語氣なり。德川時代の候文の記錄は全く對話に擬したるなるが、實は其の人

記錄文の筆法に習はず、已むことを得ずして常に書きなれたる消息體にて間に合せたるものなり。近頃言文一致體の文に、記錄體にても私僕しますなどの對話語を用うるも其の類なれど、うるさきものなり。又外國人に對して

我が　國は　最　御國と　親密です

など言ふは片成なり。國人どちこそ我がとも言はめ、外人に對しては今言として敬語にあらず。記錄文を人の前にて講釋するに

雨（○）（が）　降（れり）（って居ます）

とやうに言ふは、古語を新語に代へたる上に、更に記錄文を對話文に代へたる者にて、解釋としては却って精確ならざる樣にも言はるれど、尙考ふれば、人の前にて講ずるはやがて其の人を聽手とするなれば對話文とする方至當なるべきなり。

對話體の崇敬文に就いて注意すべきは聽者に對する第三者の待遇法なり。記錄文に於いては貴賤尊卑その本來の位に從って之を待遇すれば可なりといへども、對話文に於いては更に聽者と第三者との關係を見て、大體は聽者の尊ぶ所を尊び聽者の卑む所を卑まざるべからず。されば肉親の尊長も他人に對すれば我と同等の者として卑下し、官職同僚も上官に對すれば我と位を等しくす。人の子弟は我が門人下輩なりとも我と同等の父兄に對しては之を優遇するは即其の父兄を敬する所以の道なり。妻子弟妹乃至下輩も僕婢下司の尊敬する所は之に對して優遇するは下人をして其の尊ぶ所を尊ばしむる所以なり。此の如き者複雜重疊して實際の對話をなす事固より容易ならず。鄙人の禮に習はざる者の之に苦むは無理ならずといへども、文明の言語は社會の禮に伴はざるべからざるは辨を待たじ。

昨日は　愚父　罷出　御馳走に　相成　奉謝候

佐藤は　まだ　出勤致しません

令息　必死の　御强勉に　て　著しく　御上達云々

奥樣は　御出かけか（主人）

いえ　まだ　入らっしやいます（婢）

旦那樣は　入らっしやいますか（主人ヨリ卑キ客）

御主人は　御宅か（主人ト同等以上ノ客ガ僕婢ナドヘ）

あ　居るよ（主人ノ長者或ハ子供ナドガ目下ヘ）

はい　入らっしやいます（召使ナドガ）

(2) **兩體と四種の文**　性質より分てる平疑命感の四文は此の兩體とは別種の者なれども、其の間に一種の關係あり。四文共に兩體ある中に、

大日本は　神國なり　天祖　始めて　基を　開き　日神　長く　統を　傳へ給ふ

長袖者流　何をか　知らむ　（多カラムコトヲ願フ）

彼の　前途　幸　多かれ　と　願ふ

あゝ　盛なるかな　明治の　代

などは記錄體にして、

天地　開闢の　始　天御中主神と　いふ　神　まし〳〵き

君　何をか　學べる　怠る　こと　勿れ

（汝の　前途は　多望なり）　勉めて

とへかしな　梅　盛なる　我が　宿を

鍬形の　兜　着けたるは　大將よ

などは對話體なり。疑問文は記錄體にては疑文にして、對話體にては多く問文なり。而して對話體なるのみヤカ無くして問をなすこと前にいへり。命令文は記錄體にては希望放擲の義をなし、對話體にては眞の命令なり。前例の外に「留レト思フ人ノ早ク歸ル云々」「サモアラバアレ」「風吹カバ吹ケ」「彼ノ景色ヲ御覽候ヘ」などの如し。感嘆文は獨言體なる外は對話體に言ひ懸くる者なりがくて注意すべきは疑問文なり。

予は　何故に　軍人と　なりたるか

など言ふ題の下に記錄文を書くこと近頃流行するは、西洋文の對話的なるを其の儘に學べる者にして、國文には相應せず。此は「我ガ軍人トナレル理由」などいひてあるべき所なりヤカのある疑問文は記錄體なるも無きにはあらねど、概しては對話の語氣ある者と知るべし。

四種の文の外に**提示文**に關して特徴あり。提示文は獨言又は普通の記錄體にも存すれども、對話體なるに提示文が多きなり。物語の詞なるは多く連體語にて止めたる、よく注意すべし。總べて事はその動作狀態を其の儘に平叙するよりは之を名詞句として提示する方、人の耳に入り易き傾あり。故に對話體にては用言の終止せるよりは連體法にて結べるが多く、それやがて今の口語卽對話文の體裁を成せるなり。口語の連體法にて切れたるは偶然の誤にあらで、理由ある變遷なることを深く思惟すべし。

あれ　見よ　もみぢ葉の　數多　流るゝ

石王寺（シヤクワウジ）は　しろみ　堅くて　切り　にくき（七十一番歌合、硯士）

(3) **兩體と詞辭**　また多少の特點あり。(イ)人に於いて、記錄體は固有名詞を用うること多く對話體には代名詞多きを原則とするが、對話體にても上或は下に對する時わざと代名詞を避けて固有普通の名詞を用ゐて、「寶美謹ンデ奏ス」「臣ノ願ナリ」「親ノ遺言ヲ忘ルナ」「母人モ御承知ナラン」「先生教へ給へ」などやうに言ふことあり。(ロ)補助動詞侍リ候フ及形容詞副詞接續詞の敬語オメデタウオ立派ニサウ致シマスレバなどは對話體にのみ存し、又有リ難ウ然ル可クヤナサレタクなどクシク活の連用法の下に敬語ゴザル候ハムを略する文も對話體にのみ存するなり。(ハ)助動詞にては「時」の段に述べたる如く、キは主として對話體の直說過去に用ゐ、ケリは又多く記錄體の間接過去に用う。がくて歷史などは多く記錄體なれど、古事記・大鏡の如く對話體なる者もあるなり。ツヌも之に準ずる傾あり。(ニ)助辭にては主格のガ副格のヘは共に對話體に多く、感辭のヨヤナネカシの類も對話體に存すべき者なり。さて其等の記錄體にも用ゐらるゝは轉じたるなり。すべて對話體の語氣なる者の記錄體に轉用せらるゝは多く、記錄體の語氣なる者の對話體に轉用せらるゝは比較的に少し。(ホ)呼格名詞は對話體にあるを本則とす。

(4) **兩體の錯綜**　記錄・對話の區別略前に說ける如くなるが、一篇の文としては、物語なと、始に「云々アリケリ」と記錄體に書きて、終には「云々ナリトゾ」と對話體に結ぶ樣の例少からず。演說なとも首尾は聽衆を前に控ふることを忘れずに對話體に言へと、中程の議論などは大抵は獨言的記錄體に演じ去る習なり。此等は修辭上隨分あるべきことなるが、文法上に言ふ文の單位にあらねば玆に說かず。此等の外に文法上の一單位の文にも兩體の錯綜することあり。物語などにて言ふ地と詞の流しあひなり。

是は　諸國　一見の　僧にて　候ふ

の是ハは地より仕手を指す語なるに、之を仕手に言はしめ下を詞に候フと流すなり。

(熊谷)「存ずる　旨　ありて　申すなり」……(敦盛)「存ずる　旨の　あるなれば　聞かするぞ　是は　故太政入道の　弟に　修理大夫　經盛と　いふ　人の　末子　いまだ　無官なれば　無官大夫　敦盛と　て　生年　十六に　なる　なり」と　宣ひけり(盛)

などは詞を地に流したるなり。地を詞にして人に語らせ、詞を地にして事情を說明するは舊時の作者の慣用手段なり。かゝる詞は眞正の對話文にあらず、作者の記錄體の筆を入れたる者なれば間接對話とも謂ふべし。

明日　行かむ（と／こと）を　いふ

などの例にて前者を直接對話、後者を間接對話といふことあれど、今は主として記者より第三者の言語を引き直したるに言はむ。

大御神　怪しと　思して　細く　天の岩屋戸を　開きて　內より　告り給はく「吾が　隱り坐すに　因りて　高天の原　自　闇く　又　葦原の中つ國　皆闇けんと　思ふを云々」（素尊）「吾　此の　地に　來まして　我が　御心　須賀々々斯」と　のり給ひて（記）

此等も詞は詞と見ゆるにコモリマス御心などいふ記者よりの敬語によりて眞正の對話文にあらずなれり。之を古の神は自の上にも敬語を用ゐたりと思ふは甚しき誤なり。太閤などこそ自稱に殿下思召スなどゝも言ひけめ、さては子供も坊ッチヤンガなどとは言ふべけれど、常識ある人には有るべくもあらず。

さて又前に述べたる第三者の待遇といふことを繰り返さむに、貴者が「行ク」といへるを取り次ぐ言は『入ラッシャル』ト仰セラレマシタ』といふ如く、又先方より「明日參上可仕候」と言ひ越せるに對し「御來臨可被下旨拜承」など言ひて鸚鵡返には言ふべからざる道理なると等しく、尊き人の言語をば其の儘に繰り返しまねばざるが我が國風なり。されば史書の傳ふる所にては歌文などの外には貴人の眞正の言語は見るべからず。天祖の神勅

豐葦原の　瑞穗の國は　我が　皇御孫命の　君と　ます　べき　國なり

の如きも、意を取りて言ひ傳へたる者、祝詞宣命の如きも皆執達の人の宣する言にて直接の御言にあらず。然るに支那風にては天子も直接に臣下に對話し、それを直接に記し傳ふるより、我にも王朝の古にはそれを學べる漢文の詔勅あり。今の御代には其の風を受けて、五條の御誓文より始めて種々の詔勅の直接對話なるあり。制度の然らしむる所、私議すべきにはあらざれども、其の御言の儘を臣民の口に懸け奉るは畏き業にあるまじきか。但は之を支那風の記錄體の文と見ることを得べきか。識者深く攻究せざるべからず。

二　自記と記他

自己の上を話記すると他人の上を話記すると、其の語氣固より異なり。此の兩種を今自記記他と命名す。或は自稱の文他稱の文とも謂ふべし。兩者の相違は崇敬文にもあれども其は特に說くに及ばず。今特殊の詞辭に就いて說明せむ。

(1)　**獨立詞**

我（愉快に／樂んで／勇みて）行へり　彼（興じつゝ／勇ましく／痛快に）行へり

我も　應分の　事は　せむ

相當の　御寄附を　乞ふ

愉快ニなど自記の方のは記他にも言はるれど、勇マシクなどの類は自記に用ゐられず。應分は自己或ハ第三者に言ふべく、對する人の上には之を支配する者の外には言ふべからず。大擧傳道などは仲間內或ハ他人の上に言ふべく、人に對して自己の事には用うべからず。

(2)　**接尾語**

子供が　うれしがる

彼は　學者ぶって居る

君は　強相だ

私は　負相だ

相ゲは自記にては形容詞に添はず。ガルブル共に記他なるを、僕モ學者ブラウ」オレガ嬉シガツタカ」など言ふは、他人が見て我をブルガルと思ふ樣にせん、したるかと言ふ義なり。

(3)　**助動詞**

鳥も　啼きぬ

我は　其の聲を　聞きつ

我も　一度は　高尾の　紅葉を　見たし

高尾の　紅葉　月末まで　我を　待たなむ

春は　來ぬらし

ツヌはキケリと語氣の似たること前にいへり。かくてヌは記他に傾きたるが、自己を他物の如く取りなす時は自記にも用ゐらる。「我ハヤ餓ヌ」「記」などの如し。ダシナム、

の別は前篇に說ける如し。ラシの外メリラムも他の上を想像するなり。俳人などの自記の文に「云々スルモノナラシ」などいへる、屢見ゆる、皆誤なり。

駿臺雜話といふ書は記錄・對話・自記・記他の語氣の支離滅裂甚しき書なり。今その序文を抄して本節を終へむ。

武藏の國大城の東駿臺のもとに草の庵結びて住みける
ひとりの翁ありけり。そのかみ北國より爰に來て家居せしが
……はや二十餘年に及べり。近き頃より……日夜衾枕をのみ
親み書籍にさへ疎くなりにたり。何をか世に在る思出にせ
まし。爰に此の翁に就いて物學ぶ輩ありて……何時も
賓主共に唐錦たゝまく惜しくなん見えし。翁も客に對して
清談する事を好みて……我ながらをかしと思ふ一節もあれ
ば其の席はてゝ我が子弟に命じて大和文字に寫しおける
に……さすが反故となしてかい破り棄てむも本意なければ
さて兒輩に與へて讀ましめむと左ばらく殘し置きけらし
享保壬子の年九月中旬鳩巢の翁駿臺の草の庵にして

國語の文法こゝに盡きたるにあらず。聲音の意義、接頭尾語・造語法・文字の表記法・活用の原義・其の他の高等なる事項は他日更に公にせむことを期す。

高等日本文法 終

おのれ我が言葉の道に志してより、拾へる玉の數そふまゝに、みすまるに貫きなさんと思ひよりしは、はやく十年あまりの昔なりけり。志かはあれど ことばの海限なく廣く底ひなく深きに、あさりもて行く事どもは いつ究め得たりといふべくも覺えず。かくて年月をゆかば、身死に子うまごの代になりぬとも事果つべからず。まこと萬のことは一わたりさたし終へぬれば、人に示して、いまだ至らぬをば導き、至れる人には教をこそ乞ふべけれと、かつは思ひなりぬるをりしも、いざなひ立つる人のこれかれあるに、いでと事おこしゝは去年の初春なりけり。取りそむる筆は秋ばかりには終りなんとあらましゝも、はかなやうつせみの世の繁き事わざかにかくに障多み、あはれ今年の秋も往ぬめる頃とぞなれる。成りつる玉の御統は、天なるおとたなばたのうなじにやかけつべき、國つ神のくしろにや巻きそへつべき、えみし八掬脛のあゆひにやとり結ひつべき。ひとのふみ見るにこそ、た易くよしあしを言ひ定めて、今一きはなどかかくは言はざりつらむなど思ひおとすたびも多かりしか、我が此のふみよいかばかりかはまはならむとかつは恥しくさへなりにたり。そも〳〵敷島の道と嚴しげにいひなしけむ古より、からことば

をのみ宗と物學にする近き代まで、眞のことばの道は普くひろごらず、僅に事の意を得れば、さて足りぬとし思ふらむ人の多かるは、なか〳〵に國の恥ともいひつべきを、云かだに思ひつく人の少きこそうれたけれ。さるは國人の心をひとつに固め成すに言の葉ばかりくすしきはあらざるなるを、その道いかで輕きものにはあるべき。易りゆく世のさがなれば言のはた神代のまゝなるべきにはあらねど、本つ手ぶりはあきらめおきて移すまじきぞと思ふ心の一すぢは さりともいたづらにのみはなりはてじとわれだのみをなん力にて。はたかの易りもて來し新しき姿にも、かたはなるよこなまれるくさ〴〵のしなありて、こゝだの人のいへるからによしとは言はるまじきを、いづれ正しといひさだめたるなど、をこなりと人の咎めむもえ憚らざるさかしらはさる方に見ゆるしてよと、思ふがまゝをとぢめに書きつけつるは、明治四十一年十一月四日東京牛込のやどりにして三矢重松。

明治四十一年十二月五日印刷
明治四十一年十二月十五日發行

高等日本文法
定價金壹圓六拾錢

著者 三矢重松 東京市牛込區南町十五番地
發行者 三樹一平 東京市神田區錦町一丁目十番地
印刷者 三島宇一郎 東京市神田區表神保町二番地
印刷所 弘文堂 東京市神田區表神保町二番地

發行所 明治書院 東京市神田區錦町一丁目（振替貯金口座四九九一番）（長電話本局二四三八番）

不許複製